フェラウーン『記念日』論
——〈自己更新〉の文学として

青　柳　悦　子

内容
1. テクストをめぐる基本情報
2. 作品の基本的特徴
3. 時代状況との対応——現在進行形の状況意識
4. 作者と作品——「状況下」の文学創作
5. テクストの時間構造
6. 〈自己更新〉の文学

アルジェリアの作家ムールード・フェラウーンの遺作小説『記念日』（刊行題名（『薔薇学園』）はさまざまな意味で読者の予想を裏切る異色作である[1]。三部作とも呼ばれる生前に発表された小説と異なり，作家の故郷カビリー地方を舞台にはしていないこと，通常彼の作品に付される懐旧的で「素朴」な「地方主義」の文学というレッテルとは異なって，アルジェリア独立戦争下の現実的な時事的・政治的問題が明確に取り上げられていることがまず挙げられるだろう。さらに，テクストが複雑な構成をなし小説技法面での工夫が文学的探究としての深みに到達していること，作家の分身ともいえる主人公の倫理的・人間的な欠点が顕わに提示され作品全体にアイロニーや懐疑の気配が濃厚に漂っていることなどが指摘できる。しかしこの二点はフェラウーンのどの作品にも実は見え隠れしていた特徴であり，その意味では『記念日』はフェラウーン文学の特質をある側面において濃縮した作品であると言える。彼の最後の作品として，突然に断ち切られた彼の作家人生の到達点を示すものとしてのみならず，彼の文学の真髄を見定めるための重要なテクストとしてこの作品を位置づけながら，このテクストが提示している今日でも刺激的な革新性をもつヴィジョンについて明らかにしていきたい。

1. テクストをめぐる基本情報

ムールード・フェラウーン Mouloud Feraoun（1913-1962）の生前発表の書物は，小説としては『貧乏人の息子』*Le Fils du pauvre* (Cahiers du nouvel humanisme, 1950; 短縮再刊版 Seuil, 1954)，『土と血』 *La Terre et le Sang* (Seuil, 1953)，『上り坂の道』 *Les Chemins qui montent* (Seuil, 1957) の三作品であり，ほかにエッセイ風の散文『カビリーの日々』*Jours de Kabylie* (Bacconier, 1954)，そして評論を交えた訳詩集『シ・モハンドの詩』*Les Poèmes de Si Mohand* (Minuit, 1960) がある。これらはすべてカビリー地方に題材を取ったものであり，フェラウーンの文学が「フォークロア的」と称される[2]のもゆえなきことではない。フェラウーンと言えばまず処女作の『貧乏人の息子』が有名であり，この代表作が（スイユ社から刊行された版をもとに）少年時代を回顧する自伝的小説として読まれてきたため，彼の作品は単純素朴なものだと決めつけられてきた[3]。また，彼の読者にとってはカビリーを舞台にした三つの小説が三部作として彼の文学イメージの中核を形成していることだろう。フランスで刊行された版によって彼の作品に馴染んできた読者にとっては，これらがいずれも過ぎ去った時代を描くものである[4]ことも，この作家の温和な，あるいは無垢＝無害なイメージを形成してきたことだろう。

フェラウーンは 1962 年 3 月に死去するが，アルジェリア戦争下の状況を彼の個人的なまなざしから書き綴った日記の原稿がすでに 2 月の初めにパリのスイユ社に預けてあり，没後半年たった 9 月に，『日記――1955-1962』*Journal, 1955-1962* (Seuil, 1962) として刊行される[5]。このほかフェラウーンが友人たちへ送った手紙を集めた書簡集『友への手紙』*Lettres à ses amis* (Seuil, 1969) も出版された。そして雑誌などに掲載された紀行文や評論，『貧乏人の息子』の 1954 年版で削除された部分[6]，カミュへの書簡など種々の未刊行テクストを集めた雑文集が『記念日』*L'Anniversaire* というタイトルで出された（Seuil, 1972）。フェラウーンのスイユ社からの出版物にはすべて，スイユ社で「地中海叢書」を起こすなど編集に携わっていた作家エマニュエル・ロブレスが深くかかわっている。フェラウーンは存命中からロブレスと親交を結んでいたのだが，フェラウーン自身の回想によれば，二人の母校である師範学校をロブレスが卒業した 14 年後の 1940 年代末に（1948 年頃か？），ロブレスがひょっこりカビリー地方を訪ねてきて再会したことから，大人になった二人の友情は始まったらしい[7]。ロブレスなくしてはパリでの出版は難しかっ

たであろうし，刊行前のテクスト修正の点でもフェラウーンはロブレスの指示や助言を仰いでいた。とくに死後刊行の著作にはロブレスの編集の影響が大きい。なかでも『友への手紙』はロブレス宛ての書簡が圧倒的多数を占めるし，選文集『記念日』の内容の選択にもロブレスの判断が大きく反映していると思われる。読者がこれらのテクストを読むときにまっさきに受け取る付加情報となる注記もロブレスによるものである。

本論文で扱う遺作小説『記念日』は，上記の選文集と同じ題名であるため，この作品のテクスト成立および出版の事情について説明しておく必要がある。

まず彼の死去の状況から振り返っておきたい。

フェラウーンは 1962 年 3 月 15 日，アルジェリアのフランスからの独立がエヴィアン協定（1962 年 3 月 18 日締結）によって認められる 3 日前に，フランス極右団体 OAS（Organisation de l'armée secrète「秘密武装組織」）の特殊部隊によって惨殺された。アルジェリア民衆のとくに成人教育のための機関「社会センター」に勤務していた彼は，午前の会議をおこなっていたところ武装集団の突入を受け，ムスリム 2 名・フランス人 3 名，計 5 名の同僚たちとともに中庭に並ばせられ，フランスとアルジェリア現地民との「和解を引き起こしかねない因子」[8] として多数の銃弾を浴びせられて射殺されたのである。この OAS による暗殺によりフェラウーンは革命の殉教者と位置づけられることになる。2012 年はフェラウーンの没後半世紀にあたり，アルジェリアではこの「殉教者，殉死者」martyr という形容を付したフェラウーン紹介を多く目にすることになった[9]。彼を聖人扱いすることはかえって彼の文学に対する真摯な探究のまなざしを遠ざけてしまうことにも応々にしてつながるが，突然に不条理な暴力によって断ち切られた彼の人生の結末は，どうにも無念な悲劇としか言いようがない。『日記』の記述に繰り返されているように，そして小説『記念日』でも示されているように，大義や正しい立場の選択以上にあらゆる暴力を嘆き憎んでいたフェラウーンが，多くの名もなき犠牲者たちと同様まさにその暴力に晒され，理不尽な死を迎えたことを，後世の人間はせめて銘記し，この死に報いる道を模索しなくてはならないだろう。これまで注目されてこなかった彼の遺作を検討するこの論文がその一端にでもなればと願う。

この小説の執筆過程と内容についてはのちに詳しく検討するが，この作品は，1958 年の夏から年末にかけて第一次原稿が執筆された。これが 1959 年初旬にスイユ社に渡され，出版に向けて編集者ロブレスおよび編集主幹ポール・フラマンの検討を受けた。ロブレスの意見もフラマンの回答も否定的なもので，

原稿は著者に返却された。この出版拒否の連絡後すぐ 3 月末に，フェラウーンは自分独自の観点から手直しを加えて，作品は一応の完成をみたが，原稿はそのまま放置されたと思われる。そして, 2 年近くたった 1961 年初頭にエピローグが付け加えられたと現在のテクストの状態から推察される（あるいはすでに付されていたエピローグが書き直されたのかもしれない）。まとめると，1958 年の夏からほぼ半年強の期間でおおよその部分が完成され，1961 年初めに最後の付加がなされたとみてよい。作品は刊行されないまま，原稿は長い間眠っていた。なお，著者が付したタイトルは「記念日」L'Anniversaire である。

事情を複雑にしているのは，この作品にはもう一つのヴァージョンと呼びうるものが書き起こされていたからである。冒頭の 4 つの短い章のみの部分的な草稿ではあるが，これが 1972 年にスイユ社から刊行された選文集の冒頭に収められている。編集者ロブレスにとっては，巻末に収めた『貧乏人の息子』の 1954 年スイユ版での削除部分の掲載以上に，この選文集の目玉にしたいテクストであったのだろう。むろんロブレスは一端ほぼ完成した小説『記念日』の存在を知っているわけであるが，このことには触れず，新たに書かれた断片原稿をフェラウーンの最後の遺稿として紹介している [10]。ロブレスの説明によればこの草稿断片は，1961 年末からまさに著者の死の直前までに書かれたもので，著者によって各章末尾に付されたおそらく執筆時点を示すと思われる日付は，第 3 章については 1962 年 3 月 11 日となっており，したがって最後の第 4 章（冒頭部分のみ）はまさしく死去の数日前に書かれたものだと推察されるという。

これらの遺稿断片 [11] を，本論文で扱う元の作品（ここではこれを「完成版」と呼ぶことにしよう）と比べてみると，テクストがまるで新しく書き直されたものであり，叙述の仕方も大きく異なっていることが目につく。冒頭から語り手=主人公の「私」が，どうやら自分自身に対して「君」を多用して語りかけているような書き方になっている [12]。完成版とは異なって，少なくとも遺された断片原稿の範囲では，語り手の語りの時点を示す日付はいっさいなく，また章ごとに語りの時点がずれるという本論文で注目する叙述法もとられていない。なにより，戦闘状態になってから「7 年目」すなわち 1961 年末から 1962 年初めの時点に立って叙述されている点が決定的な相違点である。アルジェリア現地民男性とフランス人女性とのあいだの密かな関係が内容に含まれるという点はどうやら同じであっても，そこにどれほどの重きが置かれるのかは不明である。また断片遺稿では，男性は「国家」の「公務員」で，戦乱の間，都会

の一室に避難所に籠るようにして身を隠していたという設定になっていて，おそらくフェラウーンが 1960 年 11 月から住み始めたテラス付きの住居をモデルにし，その 1 年前から勤めていた「社会センター」での活動を主人公に反映させているのだと推察される。背景となるのは 1958-59 年のように植民地闘争の行方がまだわからない状況ではなく，「アルジェリア人たち」（もはやこの時点ではムスリム = 現地民[13] のことを指す用語となっていた）の独立がほぼ確定していた状況であり，テクストに込められる問題意識もまったく異なってくる[14]。断片遺稿の方では，独立闘争を率いてきた FLN（Front de la libération nationale「民族解放戦線」）の課題が，これからいかに大衆を養い教育を施すかという，解放戦士たちのそれまでの行動とは無縁の，おそらくは彼らの無能が露呈されざるを得ない問題に移行することが予見され，この新たな未来への対処が大きなテーマになっている。逆にフランス人女性との関係は，最初から肉体関係が示唆されるやや軽薄なアヴァンチュールのニュアンスが強調され，フランスとの関係の隠喩としても，非常に複雑に入り組んだ感情の屈折が描かれる方向にはない。主人公女性の名前がフランソワーズからクレールに変わっていることもこの意味で象徴的である（「明快・明るさ」などの意をもつクレール Claire という名は，物事が決定済みで，単純であるとのニュアンスにつながる）。むしろ問題はフランスとの関係ではなく，アルジェリアのこれからである。未知の未来への対処という問題は完成版『記念日』の方でも後半になるにつれてクローズアップされてきた重要な問題だが，最後の断片遺稿では，それが社会情勢の新たな段階において展開されるはずであったと想像される。現実に独立後，それまでフランスに協力した者たちの大虐殺が起きたように，フェラウーンはアルジェリア現地民が社会を作り上げていくときに生じる問題の方を真剣に問おうとしているように思われる。それは彼自身の位置づけという意味でも，切実で，困難な問題であったろう。

これとは違って完成版『記念日』の方では，独立戦争が激化するさなかを背景として，結末のわからない時代の渦中で人間が生き・考えるということを見据えた作品であることが特徴である。『記念日』のテクストで，「日ごとに，戦争が学校の内部に忍び入ってきた」（p.43[15]）と記されているように進展し続ける状況のただなかに身を置き，「出口」の「見えない」「計り知れぬトンネル」[16] の中にいながら，ただ迷っているのではなく，なんらかの——複雑だが決然とした——あり方を保ちながら前へ向かって生きようとする無名の市民の模索が提示されようとしているのである。この作品に頻出する「希望」という語は，

安易な語にも思われがちであるが，真っ暗闇の模索の中であるがゆえの切実な，しかも人間の底力を表すようなテーマだと感じられる。

さてこうした検証をしてみると，断片遺稿に与えられた題名について，いささか疑問が生じてくる。ロブレスは最晩年のこの小説草稿の出版にあたって「記念日」というタイトルを付け，さらに選文集の全体をも『記念日』と題した。だが，フェラウーンが死の直前に新たに書き起こしたこちらの原稿に元のヴァージョンと同じ「記念日」というタイトルを付すつもりであったかどうかは，大いに疑問である。刊行された断片のタイトルに付された編者の注記[17]からは，遺された書きかけの原稿に明確にこの題名が付されていたのか，それともさきに反故にされた小説の題名を編者の判断で援用して名指したものなのか，はっきりしない。後でも見るようにフェラウーン自身は，一旦完成した原稿を却下されたとき，書き直すのではなく「別のもの」を始めたいと述べていたし[18]，1960 年 4 月 8 日の手紙でも，「別の小説に取りかかりたい」との意欲を述べている[19]。フェラウーンがこの新しい小説に元の完成版と同じタイトルを与えるつもりであったとは，むしろ考えにくいし，フェラウーンの息子のラシードは，断片遺稿にはタイトルはつけられていなかったと述べている[20]。この題名は完成版では，日付を効果的に用いた反復的・循環的な叙述構造と密接な関係におかれて意味深長なテーマ性を付与されているが，断片遺稿の方にはこうした叙述構造はみられないことからも，『記念日』というタイトルをもう一度使おうとしたと考えるのは，むしろ不自然に思われる。

いずれにせよ，1972 年にパリのスイユ社から『記念日』*L'Anniversaire* と題されたフェラウーンの書物が刊行され，現在では文庫本の形でも広く普及しているため，世界の多くの読者はフェラウーンの『記念日』と言えば，このアンソロジーのこと，あるいはそこに収められた断片遺稿のことだと思いなしているだろう。

そこへ 2007 年に，フェラウーンの息子ラシードが，自ら立ち上げた出版社ヤムコム Yamcom からこの遺作小説を出版する。ラシードは，49 歳で死んだ父のこの小説が，執筆から 49 年後に出版されることを，感慨を込めて語っている[21]。作品は父の仕事机の引き出しにしまわれたままになっていたというが，ほかの作品と同様大判ノートにきれいに書きあげられたものであるらしい。ラシードは上記のスイユ社の『記念日』，とくにそこに収録された死去直前の遺稿との混同を避けるために，本来は著者がつけたとおり『記念日』として出版すべきところが，仕方なく，新たな題名を付すことにし，「薔薇学園」La Cité

des Roses というタイトルを採用した。これは作品の第一部の題名を取ったもので，作品の舞台となる学校の名に由来する。「薔薇の街」とも訳せるこの名称はまた，この学校のある地区の名でもある。

世界の出版流通機構は主要先進国を中心に動いており，アルジェの小さな出版社から出されたこの小説は，世界の一般読者にはむろんのこと，マグレブ文学研究者やフェラウーンに関心のある者にとってもあまりよく知られていない。存在は知っていても，実際に書物を手に取ったことのない人が多くいる。アルジェリアの人々にとっても事情は同様であるようだ。そのためか，いまだ研究もほとんど見当たらない。フェラウーン没後 50 周年を記念してさまざまな論集などが出されるようであるので，今後に期待したいところである。したがって本論文は，この小説をめぐる初歩的な研究であることを最初に断っておかなくてはならない。

本論文は，アルジェのヤムコム社から出されたテクストに依拠するが，上に説明した事情から，論文中では作品名をあえて『記念日』とする。それが著者のもともとの意思に添うものであるし，また息子ラシードが懸念したような混同は日本の読書界・研究界ではほとんど留意する必要がないように思われるからである。すでに触れたように，この題名は，作品の一部をなしており，他の表現に置き換えることのできない重要性を担っていると本論文では考えている。

2. 作品の基本的特徴

1）作品の概要

まず小説の内容を概観しておきたい。大まかにいえば，アルジェ郊外の学校で校長をしている現地民の中年男性とフランス人女性教師とのあいだの，ほとんどたわいもない恋愛関係を主軸とする話で，それにピエ・ノワール（現地生まれのフランス人）の男性教員 G 氏が絡む三角関係が，アルジェリア独立紛争下を背景に展開される。作品は第一部と第二部に分かれている。

カビリー地方で長年の教育経験のあるベテラン教師が，アルジェ郊外の「スラム街」bidonville にある「薔薇学園」という初等教育学校の校長に配属され，夏の終わりに妻子とともに引っ越してくる。故郷の「山」ではフランス軍と FLN の両側から住民の殺害がしばしば起きる悲惨な日々が続いていたが，主人公に対するフランス側の隊長からの脅迫がいよいよ深刻になってきたため

転居せざるを得なくなったのであった。故郷からの移住は不可避とはいえ気の進まないものであった。家庭は倦怠に包まれ，40 代半ばのこの現地民男性は，憂いと閉塞感のただなかに居る。それが 1957 年秋の新年度が始まる前のことである。

テクストの第一部は以上のように始まり，校長を三人称で示しながら，明確に彼の視点を取りながら回顧する形で，おもに 1957-58 年の学年度について叙述する。その内容は何度も時間的に行き来する。

赴任先の学校は，この校長以外の教師は全員フランス人，そして児童・生徒たちは貧しい現地民の子供たちという構成である。前年度末まで「スト」すなわち児童の登校拒否というかたちの植民地支配への抵抗運動によって学校は閉鎖されていたのだが，そのあとで新任校長として秋の新年度に学校を再開させるのは，問題が山積し，大変に困難な状況であった。10 月半ば，フランスから夫の転勤につき従ってアルジェに転居してきた新米の女性教員フランソワーズが学校に着任した。彼女は生き生きとした明るさを放ち，この学校と生徒たちへの愛情をもった感じの良い人物であった。また，校長は年度末の勤務評定を作成しながら，様々な事柄を回顧する。学校の古参教員の筆頭はピエ・ノワールの G 氏で，彼は校長に強いライバル心ないしは敵意を抱き，フランス愛国教員グループを形成してたえず影響力を行使しようとした。学校の内外で，「アラブ人」と「フランス人」の解消不可能な不和がほとんど限界に達していた。そうした中で起きた，ひとつの決定的な事件として，アルジェリア在住フランス人たちが蜂起した「5 月 13 日の奇跡」が言及される。フランス系住民とムスリム現地民の対立の激化の中で，校長の孤独は募る。フランス人だがわずかであれアルジェリア現地民寄りの心情をもつと想像されるフランソワーズを慕う校長の気持ちがテクストに写し取られる。ここまでが第一部である。

第二部は，二重の役割をもって展開される。一つは，1958 年夏以降の校長とフランソワーズの関係の進展をたどること，もう一つは，第一部で概括的・間歇的に提示された 57-58 学年度の間に起こった事柄を詳述し直すことである。叙述の形式は，日記的であったり，回想的であったり，状況のルポのようであったり，あるいは校長の書いた「物語」のテクストが転写されたりとさまざまであるが，基本的に校長の一人称語りが採用されている点，また回想や瞑想をおこなっている「現在」への言及があることが特徴として挙げられる。

学年度末を迎え学校を退職したフランスソワーズは夏の間，ブルターニュの小村に戻っている。この間，校長は彼女とのわずかな葉書のやり取りに一喜一

憂し，終わったはずの恋にゆさぶられる（彼女は夫に校長との「関係」を告白してしまったのだ）。同時に順不同の回想によって，自分とフランソワーズが前年度中，恋愛（めいた）関係にあったこと，また，二人が「もう一人 L'Autre」と呼んでいた G 氏にも彼女は好意を寄せ，なんらかの関係があったことが示唆される。語り手=主人公は，自分と彼女が前年度中に校内で交わした個人的な会話，とくに G 氏との三角関係をめぐる度重なる口げんか，交換日記，学年度末の別れの日のこと，最初に校長室で彼女の髪にキスした日のこと，フランソワーズの中途半端な数々の態度，1957 年 12 月 31 日の校長室での抱擁，その直後の 1 月 3 日に自分が逮捕されたことなどを想起する。一方，国民投票（1958 年 9 月）など，随所で，語りの現在をとりまく時事的状況が織り込まれ，それが過去の回想へと連鎖する。逮捕・投獄・暴行の記憶，監獄で自殺を試み，入院して 3 月初めに職場復帰したこと，植民者のさまざまな傲慢さ，G 氏の下劣さ，フランソワーズとの蜜月シーン，そして彼女の二面的なふるまいなどが思い起こされるとともに，今後についてのさまざまな考察も記される。「12 月 31 日」と付された断章では，1958 年の 9 月 30 日に久しぶりに彼女と再会し，通りを散歩し，公園などで会話したことが回想されたあと，最後の箇所で，それから 3 カ月たった「今日」のことに移る。10 時の少し前，フランソワーズが初めて軽いキスをしてくれてからちょうど一年目を迎えるとき，校長室で彼は待っている。最後の二つの断章で示されるように，期待どおり彼女から電話がかかってきて，夫が明日まで不在であることを打ち明けられ，校長はフランソワーズのアパルトマンに駆けつける。ドアを入るや二人が交わした抱擁と口づけの描写がなされたところで本文は終わる。

その 2 年後 1960 年 12 月 31 日の日付をもつ作品末のエピローグでは，フランソワーズがこの邂逅後すぐにアルジェリアを発ってフランスに移住し，別れてすでに 2 年になることが述べられたあと，あの日二人が一夜を明かしたこと，肉体関係があったことが簡潔に回想される。記述はむしろ，彼女と別れたあとの自分の生き方や社会状況をめぐる考察に費やされる。この 2 年間にあった大きな事件，とくにコロンたちが蜂起した 1960 年 1 月の「バリケードの 1 週間」にも触れながら，語り手（作者自身であることが匂わされる）は，もはやフランスの敗北が明白で，独立は不可避であることを明言する。最後に最近あった数日間にわたるアラブ人民衆の蜂起，とくに若者たちの反抗に言及しながら，自分と彼らの差異を一方では確認しつつも，彼らに熱い応援の言葉を贈る。そして，「さらばフランソワーズ！」の一文で作品は閉じる。

2）作品の構成

以上，内容に重点をおきながら，テクストの展開をたどったが，テクストの構成上の特徴に触れておきたい。

図表 1 に，テクストの断章構成，頁数，テクスト内部に付されている表題，また, 断章の冒頭に日付が記されている場合はその日付を一覧にしてまとめた。すでに触れたように全体は二部構成で，最後にエピローグがついている。

表を見ても明らかなように，テクストの構成上の特徴は，さまざまな不均衡，不均質さが目立つ点である。第一部に比べ，第二部は 2.5 倍の分量がある。第一部は 5 つの断章に分かれており，その最初の 3 つだけに表題が付いている。逆に第二部には表題のついている断章は一つもない。第二部は「I」から「VI」までの 6 つのまとまり（本論文では「節」と呼ぶ）に分けられており，それぞれの節は 1 つのみの断章からなるものもあれば，4 つの断章から成るものまでさまざまである（本論文では分析の便宜上，各断章に (1)(2) などの番号を割り振り，たとえば第二部第 II 節断章 (2) であれば「2-II-(2)」と略記する）。総計 21 になる断章の長さも 2 頁から 11 頁までとばらつきが大きい。またすでに述べたように第一部は三人称叙述で，第二部とエピローグは校長による一人叙述で語られている点も一貫性には欠ける。ただし本論文はこうした形式的な均整の欠損を，この作品の本質的な欠点とは考えていない。むろん混乱した，また不整備な印象を与えることは否定できないが，むしろこのような錯綜したテクストのあり方が，作品の効果に大きく関わっていると考えている。

いくつかの断章の冒頭に日付が付されていることも特徴である。そしてこの面でも不均質さが顕著である。とくに第一部での日付の用い方はやや微妙である。作品冒頭の断章には日付はなく，二つ目の断章（1-(2)）には「1957 年 11 月」，三つ目の断章（1-(3)）には次の夏の「1958 年 7 月」の日付がある。第一部のそれ以降の断章には日付が冠されていない。第一部は三人称で超越的な時点から語られており，付された二つの日付は叙述内容の焦点が置かれる時点ないしは語りが視点人物として採用する校長の意識が置かれる時点（〈視点の現在〉とでも言おうか）を示していると考えられる。これに対して，第二部のいくつかの断章およびエピローグには日付が冠されているが, これらの日付は, 主人公による一人称の語りが行われている時点（すなわち〈語りの現在〉）を示していると考えてよい。I から VI の各節の冒頭の断章にはかならず日付があるが，それに続く断章には日付がある場合もない場合もある。

物語内容の提示が，出来事の生起順にわかりやすくおこなわれていないことも特徴である。校長とフランソワーズの間におこった出来事を読者が理解するには，さまざまな回想によって示される情報を頭の中で整理して再構成しなくてはならない。1958 年夏以降の状況についても，校長による回想や瞑想と新たな事態の報告とが入り混じっており，直線的にストーリーがたどれるようにはなっていない。

全体として，きわめて混乱した印象を与えるテクストであることは間違いない。

図表 1　作品の構成

	表題	冒頭の日付け表記	掲載ページ（頁数）	備考
	「第一部　薔薇学園」		**p.11-52 (40 頁)**	
1-(1)	教師		p.13-23 (11 頁)	
1-(2)	フランソワーズ	1957 年 11 月	p.25-33 (9 頁)	
1-(3)	学校	1958 年 7 月	p.35-41 (7 頁)	
1-(4)			p.43-47 (5 頁)	
1-(5)			p.49-52 (4 頁)	
	「第二部　出会い」		**p.53-157 (100 頁)**	
2-I-(1)		7 月 12 日	p.55-64 (10 頁)	
2-II-(1)		7 月 17 日	p.65-67 (3 頁)	
2-II-(2)			p.69-73 (5 頁)	物語の転記
2-II-(3)			p.75-81 (7 頁)	
2-III-(1)		8 月 5 日	p.83-85 (3 頁)	
2-III-(2)		8 月 14 日	p.87-92 (6 頁)	
2-III-(3)			p.93-102 (10 頁)	
2-IV-(1)		8 月 23 日	p.103-112 (10 頁)	
2-IV-(2)			p.113-122 (10 頁)	
2-V-(1)		9 月 25 日	p.123-125 (3 頁)	
2-V-(2)			p.127-130 (4 頁)	
2-V-(3)			p.131-136 (6 頁)	
2-V-(4)			p.137-146 (10 頁)	
2-VI-(1)		1958 年 12 月 31 日	p.147-151 (5 頁)	
2-VI-(2)		1959 年 1 月 2 日	p.153-154 (2 頁)	電話の会話
2-VI-(3)			p.155-157 (3 頁)	
	「エピローグ」		**p.159-170 (12 頁)**	
エピローグ		1960 年 12 月 31 日	p.161-170 (10 頁)	

3）小説の題名について

上記 1）の作品の概要でも示したように，この作品では回想による反復的な物語叙述が大きな特徴となっている。このことと関係させて，小説の表題について考察を加えておきたい。

本論文では刊行者が『薔薇学園』というタイトルを付した理由を十分に認めつつも，あえて，作者が付していた『記念日』という題名を採用した。それはまさにこの題名が，反復というテーマの重要性を明確に表わしているからである。

小説題名に掲げられた「記念日（＝誕生日）」l'anniversaire という単語は，作品のなかで，読者をはぐらかすように，何度か用いられている。まず，それをたどってみたい。

最初にこの単語が出てくるのは，小説のちょうど半ばあたり，「8 月 14 日」と日付の打たれた 2-III- (2) で，本文冒頭に「フランソワーズの誕生日。」« Anniversaire de Françoise. »（p.87）と出てくる。読者は作品の鍵がここにあると感じて注意を傾けることであろう。ちなみに 1958 年の夏のこの日，校長はフランソワーズ「なしでやっていく」心を固めている。だが「誕生日」という概念の重要性はそののち曇らされる。2-V-(1),「9 月 25 日」と冠された断章は，この日が校長の誕生日で，朝，フランソワーズからの電話をもらったことが記されているが，誕生日は「私のお祝い」ma fête という表現で通されている。

« l'anniversaire » という語は年に一度の記念日を指す。テクストの回想のなかで思わせぶりに，いくつかの日付（6 月 30 日，5 月 13 日，12 月 31 日，4 月 26 日など）が強調されているため，どの日付がとくに記念すべき鍵となる日なのか，次第に曖昧になっていく。とくに 4 月 26 日は，2-II-(2) で紹介されている校長の書いた物語の冒頭で「すべては 4 月 26 日に始まった」と強調されており，また前年度をめぐる回想としては一番最後となる 2-V-(4) で詳述されるために，この日がこの物語の核心として暫定的に浮かび上がる。実際，4 月 26 日に校長に明かされた，フランソワーズが G 氏と（唇での）口づけを何度も交わしていた，という情報は，読者をも驚かせる重大な秘密の暴露と言える。だが校長とフランソワーズが一時的に決別することになるこの日が，作品の中核をなす日付であるはずはない。またこれとは別に，政治的に，そしてこの恋愛物語のひとつの転換点として 1958 年 5 月 13 日も繰り返し意味ある日付として前景化されている。

作品の末部になり 12 月 31 日が二人の関係にとって決定的な日付として浮上する。だがその前に読者をはぐらかす二つの手立てが取られていることを指摘したい。1957 年の 12 月 31 日にフランソワーズが来るべき新年の慶賀を願う挨拶をしに校長室に訪れ，初めて校長に挨拶のキスをしてくれたこと，思わず校長が彼女を強く抱きしめ髪や顔などあちこちにキスをしたものの彼女を尊重して唇だけにはキスをしなかったことが語られたのは，すでに 2-IV-(2) の終わりの方でであった。校長室でおきた印象に残るシーンではあるものの，校内でのこうしたキスや抱擁はこの日のほかにもないわけではない。たとえば 6 月 24 日の「最後のけんか」の日, 校長は校内の誰もいない教室でフランソワーズを抱きしめ顔中や髪や首にキスを浴びせ，それから罵倒して追い出したことが 2-II-(3) で記述されていたし，また 2-IV-(1) ではどうやら 12 月の初めの頃に校内の暗い階段で初めて彼女を抱きしめ髪にキスをしたことが明かされている。また 2-IV-(2) の終わりでは，年明けに起きた校長の逮捕という衝撃的な話題に移っていくので，この 12 月 31 日がとりわけ決定的な日付となる印象は作品の末部に至るまでおそらく生じないであろう。さらにまた，2-VI-(1) は「1958 年 12 月 31 日」と冠されているが，この断章では，フランソワーズが学校を去ってから初めて二人が再会した 9 月 30 日のことが語られていてその内容の方に注意が向けられるので，断章の終わりに近づくまで冒頭の日付は単に回想の時点を表わすだけの意味をもたないものと見える。しかしその断章の末尾で，叙述内容が突然 3 か月後の「今日」に移行し，彼女がくれた最初のキスから 1 年であることが指摘され，この「記念日，一周年の日」l'anniversaire を彼女が気に留めて電話をかけて来てくれないかじっと校長室で待つ主人公の意識が記されることで，この日こそが作品の中核をなす重要な日付として浮上するのである。そして二人は彼女のアパルトマンで再会し，初めて私的空間で二人きりになる，というクライマックスを迎える（とはいえ，小説本文が叙述するのはドアを開けて入った直後までである）。二人が肉体関係に至ったことはエピローグで示されるのみではあるが，そのエピローグも 2 年後すなわち 1960 年の 12 月 31 日に語りが設定されることで，この作品が〈12 月 31 日〉を「記念日」とする作品であることが一層強調される。

「記念日」は日付によって標されるのであるが，日付というものが絶対的固有性と反復可能性の両方を含んだ装置であることをジャック・デリダは『シボレート』で論じていた[22]。まさにこの小説での日付，とりわけ 12 月 31 日という日付は，回帰する日付として固有性と一般性の両方を強調している。日

付が「記念日」となるのは日付の回帰によってでしかない。12 月 31 日が記念日となるのは，最初の年に決定的に重要な事件が起きたためではなく，一年後にこの日付が再帰する折にこの日付を重視する意識が二人に存在したからである。もともとの起源における重要性によってではなく，反復されることによって付与され蓄積される重みによって，日付は意味を持ち始めるのである。

ある事柄の価値はそれ自体の有する実体的な様相に求められるのではなく，回顧や反復，重層化によってそれに付加されていくものがその価値を創り出していくということ，そのことをこの小説の「記念日」は象徴している。絶対的な価値観ではなく相対的な世界観がこの「記念日」というテーマに凝集され，作品と不可分の表題となっていることを強調しておきたい[23]。

3. 時代状況との対応——現在進行形の状況意識

この作品の特色は，テクスト執筆時の同時代状況が，作品の内容と直結するかたちで取りこまれていることである。

フェラウーンの作品はカビリー地方の過去を描くノスタルジックな文学だと思われがちである。しかし『土地と血』での 1910-20 年代の北フランスへの出稼ぎ移民の生活実態の描写など外部世界の社会現実にたいする視線はフェラウーンには無縁ではなく，とりわけ『貧乏人の息子』（初出版）では作品の執筆時期と並行する第二次世界大戦期のカビリー地方の様子が描かれており，同時代状況のなかに作品を位置づける姿勢は処女作にも見られた。『記念日』は，アルジェリア独立戦争さなかのアルジェを，まさに同時代的な視点からつぶさに描く作品である。ヨーロッパ植民地主義のおそらくは不可避的な帰結として生じた，そして世界中が注目したこの長く苛烈な紛争状態を，内側から現在進行形で捉えて作品化することが創作の意図にあったことは間違いない。

1）アルジェリア戦争（1954 年 11 月 1 日 -1962 年 3 月 18 日）の概要

以下に簡単に「アルジェリア戦争」について振り返っておきたい。

アルジェリア独立戦争は 1954 年 11 月に勃発した。それまでも長い間，植民地支配の矛盾を是正し現地民の権利を拡張するための模索，民族主義的な運動，逆にフランス側からの改革の試みがさまざまに行われてきたが，矛盾の解決には遠く，現地民の独立運動の諸グループを結集した FLN（民族解放戦線）が 1954 年 10 月に結成されて，アルジェリアの各地で 11 月 1 日に武力

蜂起したことによってこの「戦争」は始まる。ただしこのテロは決して大規模なものではなかった[24]。当初 FLN は現地民の支持をほとんど集めることもない「取るに足りない政党」であったとされるが，テロ活動を通じて存在を高めていくことになる[25]。フランス側は，この蜂起とそれに続くフランス側への武力闘争を「叛徒」rebelles たちの「反乱」rebellion ・「暴動」insurrection と捉え，これを鎮圧し「ゲリラ」partisans を掃討する軍事的・政治的行動を「平定化」pacification と呼んでいた（「平定する」pacifier という表現は，フランスのアルジェリアに対する植民活動の初期，すなわち 1830 年代から使われ続けてきた言葉である）。報道でもこうした用語が使われていた。フランスが国内紛争としての「アルジェリア事変」événements d'Algérie という名称を改め，主権を持つ国家間の闘いであったことを意味する「アルジェリア戦争」Guerre d'Algérie という呼称を正式に認めたのは 1999 年のことである。

アルジェリアの実際の日常生活ではこうした公式の言葉遣いとは異なって，この小説でも主人公二人がよく話題にしたこととして触れられているように「戦争」guerre や「独立」indépendance が問題とされていた[26]。しかし一般の現地民たちが，確信を持って，この独立運動が正当な理由に基づくものだと考えることができるようになったのは，いつの頃からなのかを明言するのは難しい。理不尽な状況を改めるための武力闘争ないしは独立を求める理念そのものが，不当な「犯罪」であるのか，それとも，ベトナム（1954 年独立承認）やモロッコ，チュニジア（ともに 1956 年独立承認）などフランスの旧植民地が相次いで独立するなか，アルジェリアをフランスの一部として維持することの方が不当であるのか，そのこと自体が長い間，問われなくてはならなかった。1830 年以来 130 年にも渡って続いてきたように今後もアルジェリアがフランスの一部であり続けることと，未知の無数の問題を抱えながらも独立することのどちらがより良い未来につながるのか，現地民の側からしてもこうした問題は容易には答えの見えない難問であった。現地民人口 800 ～ 900 万人に対し，その 1 割を超える 100 万人におよぶ在アルジェリアのヨーロッパ系住民（自動的にフランス国籍を付与され，現地民に対して特権的な地位を与えられていた「植民者（コロン）」と呼ばれる人々）が，アルジェリアの政治・経済の中核を独占し，社会を動かしていた。この社会を根底から変えることが正しい選択なのか，間違った選択なのか，あるいは正しいとしてもそれはうまくいくのか，どうすれば成功させることができるのか，答えの出ないあまりにも大きな問いであった。

FLN はその下部に ALN（Armée de libération nationale「民族解放軍」）

を組織し，断固として独立を求めてフランス側に戦闘を仕掛けると同時に，自分たちに協力しない人々はフランスへの協力者だとみなして，現地民に対しても情け容赦ない制裁を加え，粛清をおこなった[27]。一方フランス側は，「ハルキ」と呼ばれる現地民補充兵による部隊を備えたSAS（Sections administratives spécialisés「特別行政局」）[28]を創設するとともに，フランス人退役軍人たち（予備役兵）を再招集したり，徴兵期間を延長したりして兵力を大幅に増強してアルジェリアに投入した。しかし解放軍とフランス軍との戦いは激化を続け解決をみない。1954年以降フランスは，アルジェリア問題の混迷と，このための戦費拡大による経済の疲弊も理由となって，毎年のように首相が交代し政治空白を含む混迷の時期が続くが，さまざまな政治的提案も何ら効を奏することなく，戦争は長引き，先行きはますます不透明となる。そうした中，「反乱軍」を徹底的に制圧するべく，1957年1月にマシュー将軍率いる第10パラシュート部隊（住民たちによって「パラ」と通称される精鋭部隊）8000人がアルジェリアに配備され，激烈な武力衝突の時期を迎えることは次節でもみる。

FLNは武装蜂起当初はむろんのこと数年を経ても決して現地民の理解や支援を広く受ける組織ではなかったが，フランスの大方の世論もアルジェリア独立を妥当とみなし始めた[29] 1960年末あたりから，FLNが創設したアルジェリア共和国臨時政府（1958年9月設立）が独立達成の中心母体となることが既定事実化していく。その一方で，アルジェリア在住フランス人たちの本国への離反や，ムスリム現地民との対立意識は，一層高まっていく。こうした混迷の中ド･ゴールが登場して新憲法のもとに第5共和政を開始し（1958年12月），紆余曲折を経ながらもアルジェリアの自決権容認に舵を切った国民投票を実施してこれを可決に導き（1961年1月），当初冷淡であった国連総会でもこの間，アルジェリア人民の自治権と独立権を認める決議が採択され（1960年12月），アルジェリア独立の方向性は次第に明らかなものになっていく。

しかしその後の独立達成までの道のりは平坦ではなかった。この国民投票があった1961年1月には，フランスの極右植民地支持派がOAS（秘密武装組織）を結成して，フランス政府と軍に逆らってテロ活動を過激に展開するようになる。OASはアルジェリアのフランス人たちの圧倒的な支持を受けながら1961年4月にはアルジェリア駐留軍と組んで大規模な武力行動をおこなった。またOASによるフランス人政治家や官僚の暗殺，警察・軍関係への攻撃が繰り返され，未遂に終わるものの大統領暗殺（1961年9月）も企てられた。フ

ランス政府内では，アルジェリアをフランス人の住む地域とムスリムの住む国に分割する案も検討されたが，ド・ゴール大統領はこれを却下して，独立承認の方向で政治主導する。これを不満とする OAS は，パリを中心とする本土およびアルジェリアでテロ活動を激化させ，とりわけアルジェリアのムスリム住民を標的に据えた。エヴィアンでのフランス政府とアルジェリア共和国臨時政府[30]とのあいだの停戦をめぐる交渉（1962 年 3 月 7 日開始）がおこなわれている最中にフェラウーンもこの犠牲となったのであった。

1962 年 3 月 18 日の停戦合意とアルジェリア独立承認後も，OAS の破壊活動は，6 月にアルジェリア臨時政府と OAS の間に停戦協定が結ばれるまで続いた。1962 年の夏は，フランス人と（「ハルキ」に代表される）フランスに協力したムスリムの，本土へ向けた大脱出のピークで，この間に現地民による報復行為で命を落とした人も数万人にのぼるとされる。なお，フランス本土に渡ったピエ・ノワールたちやハルキたちの苛酷な運命についての検証は 2000 年代に入ってようやくおこなわれ始めたところである。また，アルジェリアでは独立後の国家運営をめぐる覇権争いが続いたが，現在もなお FLN の闘士たちが政権を掌握しており，独立戦争中に起きた事態の冷静な検証は依然として今後の課題である。

以上みてきたようにアルジェリア戦争は，独立時にフランスの 15 の県がおかれていた[31]アルジェリア地域のみの問題ではなく，フランスという国家そのものの在り方を大きく揺さぶった問題でもあった。アルジェリア問題への対応を焦点として，フランスは憲法を改正して第 4 共和政から第 5 共和政に移行することになった[32]。またフランスが主張し続けたようにフランス政府の国内問題として収まる問題ではなく，国際的な議論を巻き起こし，国連の度重なる議題ともなった。7 年と 5 カ月に及ぶ激烈な「戦争」のあいだ，フランスとアルジェリアの双方から数え切れないほどの提案がなされ，政治と暴力にたえず揺さぶられた多数の犠牲者[33]を出した末に，ようやく停戦を迎えたが[34]，フェラウーンが独立を見届けることなく，非業の死を遂げたことはすでにみたとおりである。

彼はこの闘争がおそらく人類史上稀有な，あるいは世界の現代史において重大な意味を持つ事態であることを，早くから痛切に感じていたのだと思われる。FLN の武装蜂起の 1 周年にあたる 1955 年 11 月 1 日に，この戦争の日々を内側から綴る日記（『日記——1955-1962』として死後刊行）を彼は起草した。「今

日 11 月 1 日，無関係な〔無関心な〕死者たち，不安のさなかの生者たち，理解しようとしないフランス人たち，説明を拒絶しているカビリー人たちの悲しみの日」「死者たちの日，喪の日，死者たちのように沈黙し墓石のように閉じた顔をした生者たちの日」[35] と記すフェラウーンは, この紛争を, まずアルジェリア現地民の側から，そしてそのなかでも闘争に身を投じる者ではなく，政治問題や大義の追求には無関係=無関心な一般庶民の側から見つめ，証言することを，みずからの使命として選んだことが読み取れる。こうして『日記』のなかで「無垢の人々を冷酷に殺害するこうした連中が果たして開放者=自由戦士 libérateurs なのだろうか。」[36] と明確な FLN 批判をおこなうフェラウーンは，いわばアルジェリア戦争下の現地民の「サイレント・マジョリティ」[37] を代表する立場に自らを置こうとしていたと言える。FLN のテロによってアルジェリアで死んだのは，ヨーロッパ系民間人が 2788 人であったのに対し，ムスリム現地民の数はその 6 倍近くに及んだという [38]。フェラウーンはこの声なき犠牲者たちの側に立ち続けることを，いかなる政治的なイデオロギーよりも優先し, みずからを含めたこれらの人々の証言者であることを選び取ったのである。それは，この黙さざるを得ない民の実情が，フランス側からも独立闘争遂行派からも隠蔽され，大文字の歴史の記録には決して残らないことを確信していたからこその文筆家としての強い使命感によるものであっただろう。

アルジェリア独立後は FLN の支配が現在まで続き，FLN 批判は禁忌となってきたため，フランスと FLN 側の両方から命を狙われる危険を痛感しながらも [39] フェラウーンが率直に状況を記述し考察を展開したこの『日記』は，一層貴重な証言記録となっている。

英訳版 [40] で「フランス＝アルジェリア戦争をめぐる省察」という副題が付けられている通り，アルジェリア戦争下の一般市民の状況とその状況下での考察を記録することを目的として書き続けられたこの膨大な『日記』の営みが，小説『記念日』と密接な関係にあることは言うまでもない。これについては，あとでも再びみることにしたい。

2)『記念日』の背景状況

この激烈な紛争下の状況を描き，そこに存在する問題を俎上に載せるということが『記念日』という小説の重要な一面を成しているのであるが，この作品がとりわけ背景としている 1957 年から 1958 年末までのアルジェリアとアルジェの状況について，さらに詳しく触れておきたい。

1957 年はジッロ・ポンテコルヴォ監督の映画[41]が採りあげた「アルジェの戦い」の年である。1 月，マシュー将軍の率いる「パラシュート部隊」がアルジェリアに配属され，フランス軍側は現地民の抵抗運動に対して徹底的な武力弾圧と組織壊滅のために，ほとんど無差別な市民の逮捕や拷問を始める。これに対抗してアルジェでは，FLN 側からの爆弾テロが相次ぎ，市内は暴力と恐怖と憎悪の渦巻く内戦状態となった。1 月から 9 月末まで続いたこの騒乱状態が「アルジェの戦い」Bataille d'Alger と呼ばれる緊張状態である。コロンへの抵抗運動として現地民側のゼネストが頻繁におこなわれ，大人は仕事を放棄し，子供たちはフランス学校への登校を拒否した。作品でも主人公校長の着任前の事情として触れられている通りである。かくして，フランス側の軍事力行使と行政的支配の強化，それにともなう現地民側の憎悪の拡大，FLN の武装行動の激化，またコロンたちの自己防衛意識の高まりなどによって，アルジェリア全土で戦闘がもっとも激しく展開されたのが，独立戦争期間のなかでも，この 1957 年から 1960 年半ばであると言われる。

そのなかでも特記される事件が，1958 年の「5 月 13 日の奇跡」とも呼ばれるコロンたちの蜂起である。ヨーロッパ系住民たちは 1955 年以来，フランス軍予備兵を中心に UT （Unités territoriales「国土防衛部隊」）[42]をアルジェリア全土で組織し，植民者の権利を維持するための種々の闘争や活動を展開していたが，1958 年，アルジェリア支配に積極的だったフェリックス・ガイヤール首相の内閣が危機に瀕し，自分たちの立場が危うくなってくると，5 月 13 日に大規模なデモをおこない，マシュー将軍らとともに総督府を占拠した。コロンたちは以後 3 週間にもわたって「フランスのアルジェリア！」« Algérie française! » を叫ぶ大運動を行い，アルジェリア駐屯軍は本国に反旗を翻す軍事行動に出た。すなわちパラシュート部隊がコルシカを占領，これを鎮圧しに向かった共和国保安隊もこの反乱軍に同調し，本土を脅かす事態にまで進展した。この事態を収拾するために担ぎ出されたのが，コロンにも人気のあったシャルル・ド・ゴールで，6 月 1 日に首相に任命されるとド・ゴールはすぐにアルジェリアに赴き，コロンたちに「あなたがたを理解した」[43]と演説して，この反乱を沈静化する。この象徴的な事件を機にアルジェリア問題は，ムスリム現地民・現地在住コロン・フランス本国の 3 つの陣営が，それぞれの立場からの主張をより厳しく対立させ合う緊迫状態に入る。小説で設定されている三角関係が，この三つの陣営の暗喩であることは言うまでもない。

首相についたド・ゴールのアルジェリア問題に対する姿勢は不透明であった

ものの，彼は概ねアルジェリア現地民との融和の方向を選択し，これを機に大統領権限を大幅に拡大した新憲法を立案して，1958 年 9 月 28 日に国民投票を実施する。一方 FLN は 9 月 19 日にフェルハート・アッバースを首班としてエジプトのカイロで臨時政府（GPRA）を結成し，独立を承認するものではないド・ゴールの姿勢には敵対を表明する。国民投票の結果，フランス全国で 82.6%，うちアルジェリアでは 96.6% の賛成を得て，新憲法が成立する。ド・ゴールは 12 月に第 5 共和制初代大統領に就任するが，その間，結成と同時に世界各国の承認もとりつけ始めた FLN- GPRA 側に「勇者たちの停戦」« paix des braves » を呼び掛けるものの，具体的な方向性が示されておらず，アルジェリアでは都市でも地方でも，軍や官憲の横暴と解放戦士側の過激行動が引き続き，民衆はその双方の標的とされる状況が続いていた。

以上が作品本文の背景となる大まかな情勢である。

その後の展開，とくにエピローグが書かれたと思われる 1960 年末までの状況についても簡単に触れておきたい。

アルジェリアの戦乱は断続的に続き，先行きの分からない状態のままであったが，ド・ゴール大統領は 1959 年 9 月，アルジェリアの現地民たちに自決権を認める方向での発言をおこなう。こうした傾向の巻き返しとして，植民地支持の強硬派（「ウルトラ」）たちが引き起こしたのが 1960 年 1 月 24 日から 1 月末日までの「バリケードの 1 週間」である。マシュー将軍のアルジェ師団長からの更迭に抗議してコロンたちが大規模なデモと暴動を起こし，アルジェ市は戒厳令下に置かれた。ヨーロッパ系住民と駐屯兵士たちが本国の姿勢に反対して「アルジェリア共和国」の設立までも主張したこの反乱は，結局，反乱軍の投降によって収束する。もともと本土のフランス人たちは，アルジェリア在住のコロンたちに強い共感を抱いていたわけではないものの，この反乱騒ぎによって，アルジェリア紛争を傍観する姿勢から，コロンたちをより冷やかな距離感をもってまなざす姿勢へと傾いていった。またこの反乱鎮圧を機に，ド・ゴールが提示してきたアルジェリア住民の「自己決定」の方向は次第に確定的になっていくが，一方で反乱の首謀者たちは軽微な量刑ですまされ，釈放後は多くが地下活動に転じてのちに OAS を組織することになる。

1960 年 9 月には，早くから FLN 支持を表明していたフランシス・ジャンソンを擁護してフランス本国の知識人たち 121 名がアルジェリアの独立支持を表明する。そして，オランにつづきアルジェほかの大都市では 12 月 11 日から一週間，これまでの解放戦士たちによる闘争とは異なって，若者に率いら

れた現地民の一般民衆が大挙して路上に繰り出し，独立を求めるデモを行う[44]。しばらく戦争記録の日記から筆を措いていたフェラウーンも，この突然の民衆蜂起に接するや，連日にわたって詳しい報告をおこなっている。アルジェは大混乱に陥り 120 人以上の死者を出す（うちムスリム現地民が 112 人とされる）。危機感に襲われたヨーロッパ市民がアラブ民衆を銃で撃ち殺すという，文字通り市民戦争の様相が呈された緊迫した事態となった。しかし 18 日には鎮静化し，20 日には国連総会でアルジェリア人民の自決権と独立権が小差ではあるが（賛成 38，反対 33，棄権 23）認められ，またド・ゴール大統領により翌年 1 月初めにアルジェリアの自決権を問う新たな国民投票をおこなうことが決定される。こうした中で 1960 年の年末には多くのフランス人たちが出発準備を始める。明けて 1961 年 1 月 8 日，フランス本土でおこなわれた国民投票の結果は，75％でアルジェリアの自決権を承認するものであった。

『記念日』のエピローグは，このようにアルジェリア独立が方向性として定まり始めるまでの，以上の 2 年間を総括して書かれていると言える。

このようにみてみると，『記念日』の本文が，アルジェリア戦争のなかでも，もっとも激烈な暴力の応酬が繰り返され，その解決の見通しが立たないものの，もはや植民地体制の維持は不可能であることだけは露呈していた，極度の混迷状態のなかで書かれたことがわかる。とりわけコロンたちとムスリム現地民たちの対立と憎悪が頂点に達していた時期であったと言える。そして，紛争に終止符が打たれたわけではないものの，圧倒的多数の民衆が「独立」を叫び始め，本土や世界での独立への賛同の声も高まってきて，出口がある程度見えてきたところで，フェラウーンはエピローグを付してこの作品を完結させたのである。

『記念日』は，フェラウーンが『日記』のなかでも再三強調している，先行きの不透明さ，いつまで続くかわからない理不尽な状況に生きるという問題を，小説の俎上に乗せたと言える。ところで独立戦争を描いたカビール人作家による文学作品としては，映画化もされたムールード・マアムリ〔マムリ〕の『阿片と鞭』[45]が有名である。この小説は，カビール人たちがいかに果敢に植民地支配に抵抗し過激な独立戦争を戦ったのかを克明に描き出した傑作であるが，独立後の 1965 年に発表されたこの作品がいわば事後に書かれた「勝者」の文学であることも忘れてはならない。すなわち闘争の果てに独立国家を建設し今や体制の担い手となった FLN の過去を正当化し，この勝利の功労者としてカビール人たちを位置づける目的もこの作品には読み取ることができる。そう考えると，フェラウーンの『記念日』は，フランスによる植民地支配を受け続け

ている「敗者」vaincu[46]としての意識を明確に持ち続けながら，これを逆転して勝利者になるかどうかよりも，この敗者の視点でしか見えてこないものを描き出している点を強調しておきたい。

そしてより具体的にはこの未決定の状況下で，フランス式教育の中で自己を形成しこの教育制度の中で次世代の若者たちを育てることをみずからの使命としてきたフェラウーンの立ち位置が厳しく問い直され続ける。フランスとアルジェリアという対立する二つの世界を自己の存立基盤とし，そのことで苦悩しながらも，彼が探そうとしているのは，すでに自分が身を置いているように，アルジェリア人としての主体性を極端に閉鎖的・排他的ではない仕方で打ち立てていく方向である。フェラウーンは 1957 年のある論文で，自分たち〔＝アルジェリアのムスリム現地民〕の状況は言われているほどパラドキシカルなものではなく，「私たちは「二つの椅子の間」にいるのではなく，まさしく自分たちの椅子の上にいる」[47]と主張し，この自分たちのあり方を力強く打ち出していくことがアルジェリア文学の課題だとしていた。彼の言う「自分たちの椅子」とは，おそらく教条的に議論されている「二つの椅子」のうちのどちらか片方と同一なのではなく，まだ自分たちがきちんと整理し認識できていないものの自分たちがすでに存在している仕方そのもののことであるだろう。これを認めることは，幾分かこれまでの植民地支配の経験を認めその影響を肯定することになるわけだが，こうした歴史の上で生じてきた自分たちのあり方のすべてを否定することなく，しかし否定するべきは否定しながら，自分たちの道を探していこうとする困難な軌跡が，まさに『記念日』でも示されていることに着目したい。

いずれにしても，独立戦争中の出来事やそれに付随しておこなったみずからの思考については，フェラウーンは『日記』によってその証言記録をおこない続けていたのだから，彼がそれとは別にあえて小説を創作することによって，記録では成しえない，いかなることをなそうとしたのかを考える必要が我々にはあるだろう。

4. 作者と作品——「状況下」の文学創作

1）フェラウーンの経験との対応

この作品ではアルジェリア戦争下の社会現実の諸要素が作品内に取り込まれていることが特徴であるが，もう一つ，この作品の「現実」との関わりとして

興味深いのは，実人生を生きるフェラウーン個人の生活がきわめて色濃く反映されていることである。『貧乏人の息子』が自伝小説と呼ばれるなら,『記念日』もまた作者自身をモデルにした実録小説であるかのような一面をもつ。

フェラウーンと作品の主人公男性との同一性は際立っている。カビリー地方で教職についていたフェラウーンは，戦争の激化とともにフランス官憲・軍属からの脅迫を頻繁に受けるようになり，1957 年 7 月 24 日にアルジェ郊外の街（クロ=サランビエ Clos-Salambier）の学校（ナドール学園 la Cité Nador）の校長に配属され，家族とともにこの地区——小説での記述とはちがって，富裕層と貧困層とが入り混じっている地区——に移り住む。この時期近くには友人のロブレスが住んでいたものの[48]，彼はカビリーからの移住を異郷への追放のように感じ，主人公と同じ，きわめて暗い精神状態にあった。秋の新学期を迎えると，長きにわたった（『日記』では 17 カ月と記されている[49]）ゼネストが終わったあとで登校を望む生徒とその親で学校はごったがえし，退職した教員の代わりに採用された多くの新任教員の受け入れとともに，学級の増設と教室のやりくりで年度開始業務は困難を極める[50]。教員の全員ではないかもしれないが，ほとんどがフランス人だという状況も現実のものであったようだ。また小説で 1958 年に主人公は 45 歳の誕生日を迎えることになっており，1913 年生まれの作者と（誕生月は違うものの）同年齢である。1958 年 9 月の国民投票前に，自宅にコロン側の連中すなわちパラと UT の者たちが訪れ，家中をひっくり返して捜索し，学校の鍵を没収していったこと，彼らのこうした有無を言わさぬ圧力によって学校は翌日の投票が終わるまで閉鎖とされたことも，フェラウーン自身の経験によるものである[51]。また，作品末，校長がフランソワーズのアパルトマンに駆けつけたときに出くわしたカフェでの爆発事件後の状況は，彼が，作品での設定と同じく 1958 年末に学校の近くで目撃した事件を写し取っていることが『日記』の記述から検証できる[52]。

なお校長自身の逮捕・投獄，自殺未遂とその後の入院として記されている事件は，人づてに聞き知った，アルジェに住んでいた同郷の友人アクリ Akri の件[53]を応用したものと思われる。

フランス人教員との恋愛については不明であるが，この要素は創作によるものではないかと推察される。

このように『記念日』では，あえて作者の分身であるような主人公を設定しているのだが，それはまず，フェラウーンの背負ったような複合的なあり方に根ざす人間が直面する現実をまさに現実問題として小説を通じて提示するため

であったろうし，さらにまた，読者が作者フェラウーンに対して抱いている思いこみをも利用しながら，その思い込みこそを俎上に乗せて打ち破っていくためでもあるように思われる。こうした点についてはこの論文の最後でさらに論じたい。むろん虚構的な脚色を多く施し，現実的材料を使いながら小説という架空世界を構築して，それによって現実の読者に働きかけるという運動に，フェラウーンが敏感であったことには注意しておきたい。

2）執筆過程の作品への反映

フェラウーンの実人生との対応でもう一つ注目したいのは，彼の作品執筆状況と，作品内での物語行為の間に，かなり密接な対応があることである。そこで，フェラウーンがこの作品を創作していくプロセスについて書簡をもとに検証したい。

この作品の執筆に関連する最初の言及は，おそらく 1958 年 6 月 15 日のカミュ宛の手紙に見出される「学年度〔業務〕を早く終えて新しい小説を始めたい」[54] という意思表明であろう。その 2 ヶ月後，1958 年 8 月 25 日のロブレス宛の手紙に 「新しい小説の冒頭部分を書いた」[55] とあるのが目を惹く。これが『記念日』となる原稿を指していることは，「カビール人男性とフランス人教師」の物語であると述べられているのでほぼ間違いない。しかし「仕上げられないかもしれない」「やめるべきだった」との言葉が見られ，どのように書き進むのか難渋している様子がうかがえる。

次に言及されるのは 2 か月後の 10 月 28 日で，「ヴァカンスの間，書こうとした」が「一カ月前から放ってある」とあり [56]，フェラウーンが 8 月末から 9 月末まで作品にとりかかっていたものの，2 年目の新年度を迎えるころから 10 月末まで中断されていたことがわかる。もしかしたらこの直後に，再び執筆に着手したのかもしれない。

ところが翌年 2 月 2 日の書簡では，ロブレスに原稿を読むよう促し，スイユ社に渡す前に感想を教えてくれるように求めている [57]。これは，パリに居るロブレスに送ったこの作品の原稿のことを指しているのだと考えられる。すなわち，おそらく 1959 年の年初頃までのあいだに，フェラウーンはとりあえずこの小説の原稿を仕上げたと考えられる。

ここから観察できるのは，1957 年夏から 58 年夏までの出来事を，1958 年の夏の終わりに回想するスタンスでフェラウーンが執筆し始めたこと，そして作品第二部の語りの時点を示す日付が忠実に執筆時点を再現するものではない

にしても，1958 年秋の社会状況の進展のなかで断続的に執筆が続けられ，おそらくは年末から年始にかけて書き切るという創作プロセスが取られたことである。したがって，最初の執筆時点（1958 年夏）は，作品の最後ではむしろ作品内部の時間的スパンのなかに取り込まれていることになる。本論文が注目する，語りの時点・執筆の時点がずれていき，前の発話時点が，後のテクスト内容に取りこまれていくという構造は，現実の執筆過程でも起きていた現象なのである。逆に言えば，最初の執筆時点では未来に属する事柄，不可知の事柄が，この執筆時点の推移によって，作品の範囲に入ってくることになる。事件の渦中の現在に執筆意識が置かれること，たえず不可知の未来へと意識が向けられること，そして，時間の推移とともにこれまでの経験や予測が検証され直し，自分と社会の変貌そのものがテクストに取り込まれていくこと，こうした運動性がこのような執筆過程とテクストとの関係から招来されることに注意したい。

3）作品についての作者の自己評価と原稿修正

フェラウーンは作品の出来には強い確信を持っていた。

まず，さきに挙げた 1959 年 2 月 2 日付のロブレス宛ての手紙の中でフェラウーンはこの原稿についてこう述べている。「ちょっと見て君はこれがぐちゃぐちゃだと思ってしまうかもしれないね。とにかく読んでくれ！ 感想を待っているよ」[58]。見た目には混乱しているように見えて（「ぐちゃぐちゃ〔＝錯綜した〕」embrouillé），実は周到に意図されて作られていること，少なくとも錯綜したテクスト構成はこの作品の不可避の性質としてそのまま受け止めるべきものであることを作者は匂わせ，自信をもってロブレスの反応に期待している。

この小説に関してフェラウーンが残したもっとも詳しい言及として注目されるのは，1959 年 3 月 18 日付で，スイユ社の編集責任者であるポール・フラマンに宛てた比較的長い手紙である[59]。

公刊されている書簡集『友への手紙』にはフェラウーン自身が書いた手紙のみが収録され，フェラウーンに宛てられた手紙は含まれていないため，背景の文脈は正確にはわからないのだが，この 3 月 18 日の手紙から，フラマンが原稿に対してきわめて厳しい評価を下し，現状では出版を拒否したこと，そして大幅な訂正を求めたことが伺われる[60]。これに対する返答として書かれたこの手紙では，謙虚なフェラウーンとしてはまことに珍しく，フラマンの意見に

真っ向から反論し，自分の作品の価値をはっきりと擁護している。フェラウーンは，拒否とは反対の結果を期待していたこと，また拒否するなら全面的に却下してくれた方が良かったことを冒頭で述べた後，この原稿は「やっつけ仕事でもなければ，草稿でもなく」，「ここにあなたが欠けていると感じたものは，私が故意に入れなかったものなのだ」，自分としてはどう考えてもこの作品が「良い出来だと思っている」と主張している。

さらに政治状況と恋愛とを絡めたことについては失敗ではなく，むしろ政治状況が，また道徳や誠実さの問題こそが，恋愛との折り合いを求めるものだと述べる。おそらくフラマンに否定された点なのであろうが，フェラウーンは続けて，「自分がこの作品を通じて示そうとしたのはこうした憎悪の状況のただなかでこそ恋愛感情を開花させるべき」だということだったのだ，と述べる。単なる政治=社会小説でも，消化しやすい恋愛小説でもなく，社会と個人を不可分の関係に置きながら，その両方の位相において「愛」と「憎」が相接(あい)しながら互いを育むような，実に複雑な人間的な事実の探求をフェラウーンは意図しておこなったのだと言える。社会状況の検証そのものが目的ではないことは，登場人物たちを置いた「この歴史的状況」は「自分がわざわざ強調するまでもない」ものだという言葉がよくあらわしているし，二人の恋愛に強い寓意性を持たせたことも読み取れる。おそらくはこの作品が，主人公二人の恋愛模様にアルジェリアとフランスの関係をあからさまに象徴化していることこそ，（少なくとも 1959 年春の時点で）フラマンが受け入れることのできなかったことであり，また，フランスの読書界が受け入れるはずはないと彼が判断したことだったのだろう。

このくだりでフェラウーンが憎悪のなかでも恋愛が起こりえることを示すこと以前に，そもそも「憎悪が存在するということ」を示そうとしたと述べていることも胸を突く。すなわちスイユ社から刊行されたあかつきには読者となろう人々は，今しきりに報道されているアルジェリア紛争のことはもちろん知っていて，誰もが意見や関心を持っていることだろうが，実際にいかなる「憎悪」が存在しているのか，その実情については関心も持たれていないし知られていない，ということをフェラウーンが静かに，だが強く悲憤していたことがこうした表現からも伺えるからである。小説を通じてこの憎悪が「怒りや偽善や苦悩や死となって現れるということ」を示そうとしたのだ，という彼の言葉は，どれだけフラマンに届いたであろうか。あるいは，アルジェリアの実情を知り，リベラルな立場からアルジェリアを愛し[61]，フェラウーンと近しい関係

にあったロブレスすら，フェラウーンが（『日記』のなかでも繰り返し記している）この「憎悪」の極限状況から生まれる数限りない「怒り」や「偽善」や「苦悩」や「死」を人間的事実として小説化しないではいられなかったことを，どれだけ切実に理解できたのかは疑問である。

フラマンは主人公男性の夫婦生活をもっと描くべきだと助言したらしい。これに対してフェラウーンは，よく知られている通りの学のない伝統的なムスリムの女性像をわざわざ描くことの無用を説いている。またフラマンは，主人公男性が道ならぬ恋愛をする設定に反対意見を提示し，もしそれを描くなら道徳的に否定する立場を明示するべきだといった意見を述べたらしい。これに対してフェラウーンは，この男性にとって，「到来した一度きりのアヴァンチュールを退けるべき理由はない」し，「十分に理解のできる行動」であり，それは「フランソワーズにしても同様だ」と言っている。また，すべてを詳細に書ききらない書き方についても，読者にむしろ真実味を感じさせる手法なのだと説明している。フラマンがアルジェリア現地民校長とフランス人女性教員の不倫の関係を，小説で描くべきではない不道徳なものだと非難し（これはフランス文学の伝統からして実に驚くべき主張ではないだろうか），家庭生活の描写に作品を向かわせようとしたことが読みとれる。

またこの作品で言及される社会背景や政治的事件についても疑義が提示されたようである。たとえば主人公の逮捕が理屈に合わないとか，それに続く自殺未遂という展開がありえないといった批判がなされたらしい。これに対して，（私たちが『日記』の記述で知っている通り）これが実際にあった事例であることをフェラウーンは説明している。ここに私たちが読みとることができるのは，まさしくフランス人知識人がこの時点で見たくないと思っている事柄，存在しないはずだと思いたがっている事柄が何であるかの露呈である。そして，フランスの大手出版社の編集責任者が，文学的関心・社会的関心よりも，そうした自分たちにとって好都合な思い違いと無知を維持することをほとんど無意識のうちに優先していることである。さまざまな政治状況を作品で明示することによって，対比的に，「愛がいかに状況に対して目をつぶり耳を閉ざすものであるかが，かえって示されるのだ」というフェラウーンの意見は，状況に対して目をつぶり耳を閉ざしたがっている（それでいて自分たちは友愛に満ちていると信じている）フランス人たち一般の姿勢を見事に暗喩していると思われる。

フェラウーンはこの作品には価値があり，それはかならず読者に伝わるはず

のものであること，自分の試みたことは――完璧とは言えないまでも，と修辞的緩徐法を用いつつ――十分に意義深いものであることを重ねて主張している。原稿に足りないものはなく，あるとすれば最後にエピローグとして 20 頁ほど，たとえばフランソワーズの告白を付け加えることぐらいか，と言う。しかしすぐさま彼は，そのように手を加えるのではなく，出版が無理だとしても，自分としてはこの原稿を，これ以上手を加えるべきでない完成原稿だと考えたいこと，またこの原稿をいじるのではなく，それよりは別に新たな作品を書きたいという気持ちを持っていることを吐露している――「私はそんなことをするよりも別のものを始めたいと思いますし，出版不可能でもこれを決定稿だと考えたいのです。いわば無用の長物，ということになりますが」。ここには，彼の並々ならぬこの作品への自負と，出版の可否や世評とは別に，みずからが成すべきと考えた仕事を成し，その結果の作品を残すということへの，作家としての強い覚悟が読み取れる。もしかしたらこの背景には，ロブレスらの助言に従って処女作『貧乏人の息子』の後半を大幅に削除し，改変を加えてスイユ社から出版した過去の経験への苦い思いが若干あったのかもしれない。

なお，このフェラウーンの手紙からは，男性主人公の名がこの時点ではアルル Arloud とされていたことがわかる。

それから 3 週間後の 1959 年 4 月 6 日のロブレス宛ての手紙[62]には，以下の記述がある。「復活祭の 2 週間をほぼずっと書斎で書くことに費やした。丁寧な手紙を付けてフラマンが原稿を送り返してきたことは君も知ってのとおりだ。君のに比べれば厳しくなかったけどね」。ここから，フェラウーンが原稿を指し戻されてすぐ，自分なりの推敲を加えたことがわかる。実際，現在のテクストでは主人公は匿名になっていることから，少なくともテクストの全体にわたってこれに関する修正を加えたことは確かである。そのほかにどのような変更がこのときの推敲でおこなわれたのかは，今後の草稿研究によって明らかにされるべき課題である。少なくとも主人公を，『貧乏人の息子』の主人公フルルや『土と血』『上り坂の道』のアメルとの類似を感じさせるような「アルル」という名を伏せた匿名の存在としたことは，とりわけ第一部の超越的な三人称の語りと主人公への焦点化とが重ね合わせられた，半ば客観的，半ば主観的な，微妙な叙述法をより強調することにつながったと推察される。

作者がこれほどの自信をもっていた，そして，計算された故意の混乱を含むこの作品のありようについては，以下の 5.「テクストの時間構造」で論じたい。

4）現実と作品の相違——テクストが捨象したもの

すでに見たように，この作品は，同時代の政治・社会状況や，フェラウーン個人の経験を多く反映し，それと不可分の関係にあるものの，時代状況や著者の体験のすべてを無作為にテクストに取り入れているのではむろんなく，そこにはきわめて意識的な選択が働いている。ここでは，『日記』やフェラウーンの個人状況と比べて，彼が小説に込めなかった要素について考えてみたい。『日記』と比較して『記念日』から排除されていることがわかるものとして，カビリーの状況，フランス本土やアルジェリア総督府の政治家たちの名や細かな政治的事象，また世界情勢の参照が挙げられる。

『日記』を読んで驚くことは，アルジェに転居してきてからのフェラウーンが故郷の人々について，たえずさまざまな人づてに情報を得，いつも故郷での事件や状況について思いを巡らせていることである。アルジェで起きる事件よりも，故郷で次々に起こった官憲や軍の横暴，FLN の暴虐，そして双方から苦しめられる一般の人々の実に理不尽な苦境が報告され，彼らの卑怯なあるいは悲痛な沈黙や（フェラウーンは人々を無辜の犠牲者としてただ祭り上げるのではなく，彼らの無気力・無知・怠惰・諦念・ずるさなどをも同時に見つめている），どこにも出口の見出せない無力さが考察の対象とされている。一方『記念日』では移住してきたばかりの男の想念に触れる冒頭部を除いてはカビリー地方は言及されることがなく，校長が，家庭からも故郷からも親族や友人からも切り離された，ほとんど宙に浮遊するような個人として描かれる。たとえばフェラウーンが 1958 年末に体験した故郷での父親の死の知らせと久しぶりの帰郷といった事柄も，小説テクストでは匂わされてもいない[63]。こうした側面の排除によって，作中の校長は現実的・外面的な人間関係を捨象した内面的人間としての側面が強調されるとともに，彼の恋愛関係の寓話性が強められるし，また，個別具体的なしがらみを離れて普遍的な問題への接続が強められているように思われる。

アルジェの住民を巻き込んだ大きな事件は作品にとりこまれるものの，フェラウーンが『日記』のなかで頻繁に言及する，首相ほか重要政治家の動静や，総督府のさまざまな決定などは，それを報じるテレビ，ラジオ，新聞などのメディアへの言及とともに小説ではほとんど出てこない。（作品と重なる時期について言えば，『日記』ではたとえば以下の事柄が言及されている。1957 年 8 月 14 日：ブルジェ=モヌリ首相の経済立て直し計画とアルジェリア統治につ

いての基本法[64]提出，11 月 13 日：元財務大臣でアルジェリア領維持派のラコスト氏のラジオ発言，1958 年 1 月 12 日～ 2 月 9 日：ガイヤール首相の政策と基本法の成立，3 月 3 日：憲法改革と基本法の頓挫およびガイヤール内閣の危機，8 月 15 日：サハラ砂漠をめぐるフランスの態度の豹変，9 月 16 日：パリで起きたジャック・ススステル元アルジェリア総督の暗殺未遂，9 月 20 日：カイロでの臨時政府の設立とそれに対する報道ぶり，など)。

また作品の中で「5 月 13 日」(の「奇跡」) などの事件が言及されてはいるが，『日記』での記述とはちがって，きわめて具体性を欠き，事態の進展の経緯や出来事の描写，犠牲者の人数などが伝えられることはないことが顕著な特徴である。ここから小説を駆動しているものは，報道や歴史が伝えるような事件そのものへの関心ではなく，それを背景とした，そのさなかを，あるいはその状況のすぐそばを生きた人間の方への関心であることが鮮明に感じられる。言い換えれば，小説では，現実の事件に触れながら，事件そのものを主題化はしない，という姿勢が明確である。政治家の名や政治的な事象が言及されないのも同じ理由で，報道の対象となるそれらの要素は，結局のところ市民の生活の上に漂う符牒のようなものにすぎず, メルクマールにはなるかもしれないが, 人々の生活のありようそのものからは目をそむけるきっかけにしかならないと考えられているように思われる。

また『日記』に頻繁に見られ，小説にはほとんど出てこない事柄として，世界情勢への言及がある。フェラウーンは，アルジェリアのこの紛争下を生きながら，世界の動きにたえず関心を払っている。(『日記』にはたとえば以下の言及がある。1957 年 7 月 31 日：チュニスでの国際会議での仏政府と FLN の交渉およびブルギバのチュニジア共和国樹立宣言と大統領就任，8 月 14 日：アルジェリア基本法案の北米・中南米諸国への提出を経た国連への提出，東西冷戦下での FLN のソビエト接近と，それにともなう，アイゼンハワー率いるアメリカ合衆国の中東における反共政策との齟齬への懸念，12 月 17 日：人工衛星開発をめぐるソ連の「スプートニク」とアメリカの「グレープフルーツ」の競争と後者の敗北，それをめぐる西洋全体の大騒ぎ，NATO 会議へのアイゼンハワーの出席とアルジェリア問題の取り扱い，1958 年 1 月 12 日：地球規模の終末戦争・核爆弾使用の危機とそのなかで瑣末な扱いをされるアルジェリア問題，8 月 15 日：イラク，イラン，レバノン，キプロス，中国で起こっている戦争状態，それに比してジュネーヴでおこなわれている学者たちの平和ボケしたようなスピーチ，など)。小説では，こうした世界情勢との同時代性の

なかにアルジェリア問題を直接定位する姿勢はほぼ取り除かれているが[65]，フランス本土との関係も少なくとも政治レベル・時事問題のレベルでは言及されないために，むしろすでにアルジェリアが一つの独立した空間として位置づけられている印象が生じる。一方でこの生活環境が寓意的に提示されることで，小説世界は，形而下の現実状況を超えて人間の普遍的な問題を描出する場となっているようにも思われる。

また，フェラウーンの実人生と比べて小説に盛り込まれていないのは，学校教師以外のフェラウーンの側面である。2 年後に書かれたエピローグでは，語り手は自分が，作家として何冊かの小説を出し，そのなかで出身校である師範学校を理想の教育機関であったかのように，現実以上に美化して描いてきたことを述べている。だがその部分以外では，作品の校長は教職者としての面しか持ち合わせない人物のように描かれている。彼はフランソワーズとの出来事を「物語」に書いてみせるが「自分は物語を語るという特殊な才能は全く持ち合わせていない」（p.66）とされている。しかし現実のフェラウーンは，総督府での晩餐会に呼ばれたり，ジャーナリストと面談したり，基本法の成立後はアルジェで議員に推されたり[66]，あるいは有名作家アルベール・カミュと懇談したりする，政治的・社会的・文化的な重要人物なのである（カミュとは 1958 年 4 月 1 日にアルジェで偶然会い，11 日に改めて訪問してきた彼と 2 時間にわたって打ち解けて話したという）。とりわけ 1958 年 12 月 13 日から 20 日まで，フェラウーンは「特命出張」でパリへ行っている。そこで外務省入りの打診を受け，実際外務省にも呼ばれたがフェラウーンはこの提案を拒否した。さらに政府機関本部に招かれ，偶然ド・ゴール大統領の姪とおしゃべりをしたり，またアンドレ・マルローとも面談する。突然「青年委員会」の委員に任命され，ド・ゴール大統領とも直接握手を交わす。帰国してから書いた日記の文面では，自分はフランス人ではないし，フランスに統合可能な人物ではないことを，これらのフランス人たちは十分に知っている，と記しているが[67]，父の死亡に伴って帰郷した直後の一連のこうした経験の中で，フェラウーンはあくまでアルジェリア現地民として生きる自分の存在のあり方を，改めて強く自覚したのだと思われる。作品には，具体的な経験としてはこうした事情はまったく反映されていないが，あえて主人公を，一介の教育者と位置づけながら，フランス（＝フランソワーズ）から誘惑される立場にあり，しかしフランスとは決然と異なる立場にある者として描くテクストの姿勢はこうした経験を下敷きにしているように思われる[68]。小説のなんでもない細部や，たわいもない恋心

の紆余曲折，主人公の瞑想などが，きわめて高い暗喩的意味に満ちていることに読み手が注意し始めると，簡単には探究しきれないほどの含意に満ちていることは指摘しておかなければならない。

5. テクストの時間構造

この作品が，複雑なかたちで反復を用いた構成・語り方で作られていることは大まかにはすでにみた。以下にはより詳細に，この小説の物語叙述が取っている時間的構成法の特徴について，二つの面から分析と考察を加えたい。反復的な語りの側面と，語りの時点の移動の側面からである。

1）回顧的反復法——同じ事を何度も語るテクストの自己反復

この小説が過去の振り返りという思念の動きを軸に作り上げられていることは，作品の最初の断章でもテーマ化されている。ここでは，長年教員を務めた故郷の地方から危険を逃れてアルジェ郊外に身を落ちつけた校長が，後にしてきたふるさとにばかり意識が行ってしまうことが話題とされている。

> 〔…〕そして今彼は後ろを振り返り，思い出を呼び起こし，良いことも悪いこともすべてを旧懐しないではいられなかった。ときおり彼は頂点にまで遡り，そしてその頂点から彼が長い年月をかけて築き上げてきた大伽藍の底辺にまで再び下降した。まるで誰か興味を持ってくれる人にこの大伽藍を見せつけたいと望んでいるかのように，そして今でもそれを自慢することができるかのように。実際，すべてが解体され，打ち壊され，無に帰されてしまったものの，この精神の構築物だけは傷つけられることなく残され，ときどき彼はそこに避難することができたのであった。さかさまの夢，それが彼という人間の姿を決定的に描き出しているのであった。（p.17）

ここで半過去形を多用して習慣的な行為として示されているのは，主人公がたえず回顧を繰り返していること，そして「彼という人間の姿〔／彼の輪郭／彼の限界〕」ses limites がこの過去の反芻によって描き出されるということである。彼という人物はこの過去の掘り返し運動の総体そのものであり，それが「さかさまの夢」un rêve à rebours，すなわち前方へではなく後方へと繰り広

げられる夢想，希望とは裏返しの何ものか，しかし逆説的に夢へとつながる何ものか，として規定されている。主人公の精神が繰り返しおこなう回顧運動が，作品全体の隠喩として凝縮されているくだりであると読むことができる。

まさにこの小説の物語叙述の特徴の一つは，こうした反復的な語りの運動がテクスト全体の構成原理として採用されていることである。

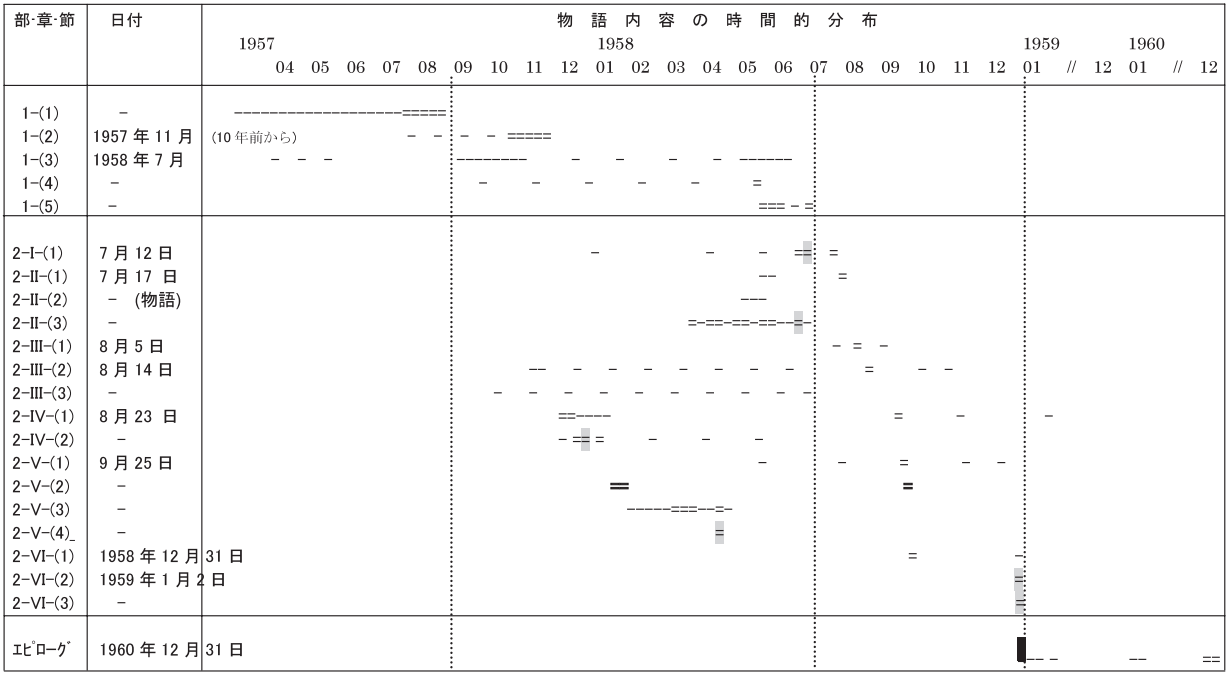
既にみたように，この小説は第一部で大まかに 1957 年夏から 58 年夏までの一年間を概観し，第二部で，58 年夏以降の事情とともに，再度前年度に起きた事柄をより詳細に語る，という形式を取っている。しかも一度でなく何度も語り直すという点が特徴である（図表 2）。

より詳しく見てみよう。第一部の内部では，1-(2) で学年度始めから 11 月までのことが語られた後，その時期を含めた学年度全体が 1-(3) で概観され，1-(4) でも再び学年度全体にわたってさまざまな状況が散発的に回想される。そのなかでもやや焦点が置かれていた学年末に近い時期のことが，次の 1-(5) で再び採りあげられる。

一人称の日記体に近い第二部では，語りの現在時に関わる記述のほかに，過去の回想がなされ，2-I-(1) は学年末の出来事，2-II-(1)(2) では 4，5 月の出来事，2-II-(3) では詳しいかたちで 3 月から 6 月までのなりゆきが想起される。2-III-(2) と (3) では，前年度の全体が回想の対象となっていると言え，そのあと，まだ隠されていた秘密のように，2-IV-(1) ではフランソワーズ着任後から 12 月までのこと，2-IV-(2) ではとくに 12 月 31 日のシーン，2-V-(2) では年明けに起きた主人公の逮捕に続く時期，2-V-(3) では投獄から入院を経て職場復帰してから 5 月ぐらいまでの出来事，そして 2-VI-(4) ではフランソワーズが G 氏との関係を告白した 4 月 26 日の情景が明かされる。こうしたまとまった回想だけでなく，第二部を通して語り手=主人公は，たえず回想をおこない，それに伴ってさまざまな思い出，問い直し，悔恨，怒り，喜びなどを叙述する。繰り返され，更新される回想（すなわち出来事の反復の反復）を通じて少しずつ小説世界の中に事象と物語が素描されていくのである。

ジェラール・ジュネットは，『物語のディスクール』[69] で物語言説とそれが提示する物語内容との関係を類型化した。「頻度」（回数）の観点から言えば，この小説の上記の側面は，一回の出来事を一度語る「単起法」singulatif（もっとも一般的な語り方）ではなく，一回の出来事を複数回語る「反復法」répétitif に属すると大まかには言える。ジュネットがとくに注目したのはこれらとは異なる第三のタイプ，すなわち複数回の出来事を一度きりで語る「括復法」

図表２ 『記念日』の物語言説／物語内容の時間構成



＊注記　－－… ：言及
=== ：やや詳細な記述・描写
▒：重要な出来事の暴露、詳細な描写
▉：きわめて重要な出来事の暴露

itératif であるが，この小説でも前年度中何度も起きた事柄を概括的に叙述する部分（したがって具体性を欠いた要約となる）はこれにあたるだろう。たとえば G 氏の校長への敵意やフランソワーズの偽善，校長とフランソワーズが交わした会話や議論の傾向などは，しばしばこうした形で提示されている。特徴的なのはこうした括復的ともとれる叙述が繰り返されることで，括復法もが反復法の中に納められていることである。

ジュネットは「反復」の現象について，「順序」の観点からも注目していた。出来事が起こった順に物語言説がそれを叙述していくことをとりあえずの基本と考え，その体制の中でこの順序を乱して語るのが「錯時法」anachronie である。錯時法には，過去のことに戻る「後説法」analepse と未来のことを先取りする「先説法」prolepse とがあり，一般に小説が頻繁に用いるのは後説法である。後説法はさらに, これまで語っていなかった昔のことを喚起する「外的」後説法 analepse externe と，すでに語ったことのある時間帯について語る「内的」後説法 analepse interne とに分けられる。ジュネットが注意を払おうとするのは，一度語ったことが，後から語ったことと「干渉」し合い複雑な効果をもたらす現象である。したがって彼の関心が向けられるのは無論，内的後説法の方であるが，それはさらに，出来事としては言い落していたことを付け加える「補完的」後説法 analepse complétive（別称「追説」renvoi）と，一度言及してあった出来事を再び語り直す「反復的」後説法 analepse répétitive（別称「再説」rappel）に分けられる [70]。干渉の問題がより大きいとされるのは，もちろん後者である。

『記念日』の特徴は，この「反復的」後説法（別称「再説」）が大規模にまた執拗に採用されていることである。すでに第一部のなかでも反復的後説法が用いられているが（1957-58 年度全体を大まかに回想する 1-(3) のあとで，やはり同じような回想をおこなう 1-(4) が続いて，もたもたした印象を与えることだろう），100 頁に及ぶ第二部の全体が，繰り返し，この反復的後説法を駆使しているのである。とりわけ第二部は，語りの時点の移行とともに物語内容の新たな進展を伴うので，物語言説の回顧的な後戻りの運動が対比的に強調される。また，同じ時期のことないしは同じ出来事をめぐる事情が何度も語り直されることで，過剰なまでの「再説〔＝思い返し〕」rappel がテクスト上で展開されている。1958 年 3 月から 6 月の時期のことは，初めは二人の関係のとりあえずもっとも進んだ時期として示され，それから数々のいさかいのあった時期として示され，さらに二人の親密な関係が始まったことを書いた恋愛物語の

テクストが紹介され，そのあとで，二人が赤いノートを交換し合ったという具体的な「関係」のありようが明かされ，再び曖昧にフランソワーズの偽善が言及されたり，5 月 13 日のコロン蜂起の期間もフランソワーズは勤務をやめなかったことなどこの時期のさまざまなことが思い返され，そして春は校長が退院して再び学校に戻った時期であったことが明かされて，フランソワーズと G 氏の接近や G 氏への彼女の嫉妬と恋着が言及され，最後に 4 月 26 日のいさかいの情景がつぶさに再現される，といった具合である。すなわち読者は，次第に事柄の様相を明確に知るようになりつつも，むしろ「再説」がおこなわれればおこなわれるほど，もっと隠されたままの事柄があるのではないかと疑う気持ちにもなるであろう。また，何度も思い起こすたびに少しずつ照らし出される様相が違ってくるために，出来事の〈真相〉が明らかになってくるというよりは，本当は何があったと言いうるのかがわからなくなってくるのである。

ここで注意しておきたいのは，内的後説法という側面での『記念日』の特徴は，ジュネットが区分したような「補完的」な後説法と「反復的」な後説法とを，もはや厳密に区別することが不可能な点である。すでに詳細に提示された出来事をもう一度それと抵触するように叙述し直す場合はあきらかに（「補完的」ではない）「反復的」後説法であると言えるが，すでに覆った広い時間的振幅部分の内部で起きた，これまでは一度も触れられていなかった出来事を後から開示する場合，それが「補完的」後説法であるか「反復的」後説法であるかは二者択一的には判断できない。新しい情報提示でもあり，広い時間帯についてみれば再説でもあるのだから，むしろその両方だと言わなくてはならない。また，すでにごく簡単に言及されていた出来事を新たな詳細を加えて述べ直す場合にしても，これはむろん「反復的」後説法であるものの，初めて付加される細部だけに限って考えれば「補完的」と考えられるわけで，「反復的」か「補完的」かのどちらかに定めることはやはり難しい。『記念日』のテクストは，ジュネットのこの二分法を予め想定してこれに挑むかのように，すでに述べられていたことと初めて述べること，語り直される事柄と新規に語られる事柄とを，全体としての語り直しの中に置くことで，故意に判別不可能にしているように思われる。知っていることと知らないことの区別，わかっていることとわからないことの区別を付けること自体が人間にとって困難な問題であることを強調しているとも言えるのではないだろうか。

第二部の語り手=主人公自身が何度も同じ過去を振り返り直すという精神運動に対して自意識的であることが，テクストのなかではっきりと表明されてい

るという点は見落とせない。たとえば 1958 年の 3 月 20 日から 4 月 26 日までのあいだに校長とフランソワーズが交換し合った一冊の小さな赤いノートは,「何度読み返しても困惑する」(2-II-(3)) と彼は吐露している。語り手=主人公は,単に過去の事柄を報告するのではなく,何度も回想する自分自身を意識し,あえて回想をおこなう現在の自分の思考運動に言及する。語り手=主人公は回想を行うくだりでしばしば,「そして今では回顧的に脳裏に浮かんでくるのだが」(p.94),「覚えているところでは」(p.101), たぶん「こうだったと思う」(p.96) など,過去に関する情報が自分の主観的な現在の精神行動によるものであることを明示する。二人の交わした会話を回想しながら「君は覚えているかい？」(p.106) と現在の (不在の) フランソワーズに語りかけたり, 自分の回想行為を,「過去を甦生させ,それをこれらの頁のなかに閉じ込めて永遠に現在のものにする」(p.105) ためのものだとも明言している。過去は現在のなかで更新されるべきものとして措定されているのである。

さらにテクストは,この回想が不確かで疑わしいものである可能性をあえて提示する。「もし私の記憶が正しければ」(p.96) という挿入もあれば,後でも引用するように,さらに明確に,会話を直接話法で再現したあとに,「フランソワーズとのこうした会話を文字どおりには取らないでいただきたい」「もしかしたらこんな会話は起きなかったのかもしれない」(p.116) とすら語り手は述べる。第二部のテクストが,語り手=主人公が一人校長室でノートに書き記していることであることを示唆しながら (「夏休みの初め以来,私はこのオフィスで,こうした会話を再創造しこのノートの内部に閉じ込めようと努めてきた」p.117),告白しなくてはならないこととして,こうした過去の事柄は「ますます捉え難くなっていってしまい,私はしばしば粉飾を凝らすこともあるし, 場面を継ぎ合わせたり, 出来事や会話の順序を変えたりしている」こと,「つまりは小説みたいなものを書いている」わけだと述べている (p.117)。テクストは語り手=主人公の回想がまさに信頼できないものであることを強く警告している。読み手に求められているのは,したがって,校長の告白を通じて過去を鮮明に再構成することではない。

語り手=主人公が想起を繰り返すことによってむしろ明らかになってくるのは過去の自分が陥っていた誤解の可能性でもあり (「こういうフランソワーズのことをこの時私はどうも見抜けなかったようだ」p.96),また回想するたびにますます自分の判断のあやしさが露呈してくるということである (「しばしば私は実はこうであったのではないかと考えてみる」p.98)。こうして,この

テクストがたえずおこなう回想のし直し，過去の出来事の問い返しは，出来事そのものについてはある程度明確化していく機能をもっているが，同時に物事のもつ意味については不確定性を増大させる働きをし，また知りうることの限界をも露呈する働きをする。すなわち反復的後説法の効果はなんらかの真実の最終的な暴露に向かうのではなく，不可知性や未決定性を前景化する方向にあると言える。

ここで，過去の事柄の喚起という後説法に関係する問題として，この小説における「括復法」の特徴的な用い方についても触れておきたい。この節の冒頭でも触れたように，過去の想起に関する「頻度」の側面でのこのテクストの特徴は，一度起こった事柄を複数回語る「反復法」を大規模に採用していることであるが，複数回起こったことを一度で語る「括復法」も特徴的な仕方で用いられているのである。

その典型的な箇所として，さきにも引用した文章を含むくだりを検討したい。一般論や，二人のあいだに交わされたたくさんの議論を概括して論じたあとで前置きなく提示される以下の会話は，いつ頃なされたものかは不明であるが，校長が丁寧な言葉遣いをしている（vous を使って話しかけている）ことから考えても，またその前の叙述とのつながりから言っても，おそらくは 1957 年 12 月初旬から中旬にかけての会話だと，とりあえず思われる。

> 「私は人類全体を愛したいんです」とフランソワーズは言い切ったが，彼女の目には狂人のような炎があった。
>
> 「でも，あなたは時々ひとを軽蔑なさっているのでは？」
>
> 「ええ，そうかもしれません。傷つけられると私も苦しくなりますから。そうすると突然，反撃できるようになるんです。機械的な反射行動みたいなものです。そしてしばらくしてから，そのことについて考えるんです。よく考え直してみたこと，それが一番大事ですよね。とりわけ，心に訊いてみたことが。」
>
> フランソワーズとのこうした会話を文字どおりには取らないでいただきたい。もしかしたら，本当には，こんな会話は起きなかったのかもしれない。しかしながらこれに類することは数多く起きた。ときには深刻なあるいは高尚な会話だったり，ときには無意味なあるいは馬鹿げた会話だったり。そんなことは私たちは気にもかけていなかった。なぜなら二人のどち

らにとっても大事なのはその瞬間ごとにただ互いに身を寄せ，重大なものでも下らないものでも話の内容からはいつのまにか遠く離れて，一緒に心をさまよわせることであったのだから。(p.116-117)

ここでは，一度きりの会話と見えるものが再現されているが，それは実際におこなわれた会話ではないことが示唆され，複数の似たような会話の代表例または総合例のようなものとされている。ジュネットはプルーストの特徴として「疑似括復法」，すなわち括復法の体裁をとっていながら括復法とは考えられないパラドキシカルな語り方を指摘した。たとえば，「毎週土曜日は」などと始まり半過去形を用いて描写されるくだりが，あまりの精密さと，一回きりの出来事であることを示す要素（たとえば「初めて」など）を含んでいるために，何回も繰り返された出来事の総括だとは受け取ることができないケースである。『記念日』の上に引用したくだりには，これとは違った意味での，しかし一層複雑な疑似括復法の事例を私たちは見ることができる。このくだりは，一回きりの出来事（会話）と思えるシーンを提示しておきながら，それが括復的な言説をなしていたと説明し直し，しかも二人の恋愛意識からすれば（すなわちこのテクストにおける意味作用としては）ここに括られて示されている内容そのものが何であってもかまわないとしている。つまり，単起法であると見える叙述なのに括復法とされるという疑似括復性と，括復法でありながら何を括っているのかが不明だという疑似括復性とが示されているのである。括復法の言説は，よほど概括的なものにとどまるのでないかぎり（たとえば，毎朝太陽は東から昇る，など）虚偽を含むものとならざるをえないという本質的な制約がある。『記念日』のテクストは，あえて，ある会話の一回性と，それに類する一連の会話の複数性とを接合させる。それによって，複数の会話の総合的象徴としての一回の会話というものは存在しないことをも暴露しているように思われる。すなわち，括復法は，意味のある具体性を帯びた途端に，虚偽性と架空性をまとわざるを得ないのだ。この小説が，語る行為の相互反復によって成り立っていることを上に見てきたが，それだけでなく，回想によって示される出来事の方も純粋に一回きりの事件としてではなくほかの事象と相互反復的な関係にあるとされることは多くのエピソードについて言えることである。それは作品で描かれる事象の象徴性という問題と深くかかわりつつ，あらゆる事象が，個別的でありつつ，ほかの事柄と相互反復関係にあるという認識の提示でもある。しかもこのテクストはこうした認識に安住するのではなく，この前

提に立った人間の苦悩を見つめようとしているように思われる。ものごとの一回性と本質的な反復可能性との不分離こそ日付（ないし記念日）が象徴する問題であることはデリダの議論が示していたことであるが，疑似括復的ヴィジョンとはまさにこの問題であり，これを人々が生きる現実状況のなかに置きつつ人間を支える意識の鍵としてこの作品は提示しようとしているようだ。

『記念日』は，一回性と反復性，個別性と一般性とのあいだのきわめて微妙な結びつきを前景化するテクストである[71]。ここで第二部の表題「出会い」rencontre の意味についても触れておきたい。「出会い」についてこのテクストでは，校長とフランソワーズのつまり個人と個人の出会いは誠意あるものでありうるのに，この同じ出会いがアルジェリア現地民とフランスという二つの共同体の出会いとしては失敗せざるをえない，と議論されている（p.142）。すなわち「出会い」は個人と社会の二重性の象徴としてテーマ化されているのである。単数形で示されるこの「出会い」が無数の出会いの総称として用いられていることも言うまでもなく，第二部の表題は一回性と反復性をこの語に接合させながら，一度しか起こらないはずの「出会い」が（出会いとは最初の邂逅のことを指す言葉である）新たに更新される可能性をもここに込めて示唆しているのではないだろうか。

2）語りのポジション移動——挿入的な語り

この小説の物語叙述が採っている時間的構成法のもう一つの特徴は，物語行為の時点が移動し，それが，テクスト全体がカバーする物語内容の時間的振幅の中に位置づけられる点である。ジュネットの分類によればこれは「挿入的な語り」と呼ばれる語り方である。

ジュネットは物語内容に比した物語行為の時間的位置から語りのタイプを 4 つに分類した[72]。すなわちもっとも基本的な語り方である「後置的」な語り（過去形で物語を語るケース），第二は実際の例は稀である「前置的」な語り（未来形で物語を語る予言的・予報的なケース），第三は「同時的」な語り（現在形で語る実況中継的な語り），第四が「挿入的」な語りで，部分部分においては後置的であるが作品全体で見た場合には語りの時点が物語内容の内部に位置づけられるケースである。『記念日』には「同時的」な語りも作品末部で見られるが，ここで論じたいのは，「挿入的」な語りの側面である。

ジュネットによって挿入的な語りの典型例とされるのは，書簡体小説（リチャードソンの『パミラ』やラクロの『危険な関係』）や日記体の小説（ジッ

ドの『田園交響楽』やベルナノスの『ある田舎司祭の日記』）である。ジュネットは上の 4 つの語りの時間のタイプのうち，言うまでもなくもっとも複雑なものとして，この挿入的な語りに着目する。「語りが物語内容に逆作用を及ぼすような形で両者が絡み合」う，という相互干渉の現象が起きるからである。ジュネットは，まずは複数の手紙の書き手が存在する書簡体小説（ラクロの『危険な関係』のケース）に着目し，また「もっとも微妙でもっとも分析しがたい」ものとして，「日記の形式がくずれていって，不確定で，さらには一貫してもいない時間的位置を持つ，一種の事後的な独白に達している」ケースに言及している[73]。ジュネットが想定しているのはカミュの『異邦人』の前半部分であるが，『記念日』は，まさにこれに類する事例と言えるだろう。

ジュネットが『異邦人』に注目したのは，この作品において，物語内容と語りとが時間的にきわめて接近していることから生じる「軽度のずれ」と「絶対的同時性」とが引き起こす複雑な効果である。これは『記念日』の場合にも相当する。第二部の語り手は，この微妙にくずれた曖昧な日記形式の叙述の中で，その日や最近起こったことを語りながら自分の行動を説明し，自分に対して若干の時間的な距離と，また場合によっては批判的な距離をとってもいるが，それと並行して，今考えていることを吐露する主体でもある。ジュネットはこの「精妙極まりない摩擦効果」や，くずれた日記形式が含意する（語りの）「不確定な」な時間的位置づけの効果については，それ以上詳しく述べていないが，『記念日』の分析にあたってはこうした点を含め，挿入的な語りの形式がもたらす効果ににについてもっと考察しなくてはならない。

後置的な語りの一人称小説の場合でも，主人公=語り手は，語り手としての超越性をもちながら作品内部の登場人物であるという二重性を備えることになるが，挿入的な語りをおこなう語り手=主人公の場合は，語り手としての存在もが物語世界内に位置づけられるため，語り手にも登場人物としての具体性が与えられる。『記念日』の場合はとりわけ，第一部では校長が三人称で名指され客体化されているために，語り手=主人公の具体的人物性，言いかえれば，読者の目から見て批判的なまなざしをも受ける客体性がより強められている。ここで指摘しておきたいのは，この小説では第二部の日記的な語りのなかでも，かなり頻繁に動詞時制に単純過去形が用いられていることである。これは語り手が，物語内容に対して超越的なポジションにあることを暗示する。第二部の語り手が現在形や未来形あるいは複合過去形といった発話者の存在の現実性を含意する動詞時制とともに，これとは反対の機能をもつ単純過去形を使用する

ことは，この語り手=主人公の存在様態の二重性をさらに高め，強調することになる。語り手=主人公は，7 月 12 日に葉書を受け取って心をはずませ，9 月 25 日にその日の朝自分の誕生日のお祝いに電話をもらったことを報告し，その二日後には国民投票前の混乱のなかに置かれる登場人物として筋の構成に参与する存在であるが，どこから語っているのかわからないような語りをもおこなって作品に超越的なヴィジョンを与える存在でもある。ここから，アルジェリアの現実を，具体的に内部から描く視点と，それと同時に普遍的・超越的な展望のもとに眺める視点との両方を併存させることがこの作品の狙いの一つなのだと考えることができる。とりわけこの企図には，劣った知性しかないアルジェリア現地民には普遍的なヴィジョンなど持ち得るはずはない，というフランス人･ヨーロッパ人の思いこみに対する反発があるだろう。これはフェラウーンを民族学の対象となるような植民地の田舎から出た，素朴な地方主義作家と位置付けたがる根強い姿勢[74]に対する抵抗でもある。

挿入的な語りを採用する作品として，『記念日』にはさらに，ほかの多くの例とは異なる特徴がある。カミュの『異邦人』の前半や，ラクロの『危険な関係』，あるいはジッドの『田園交響楽』その他，語りの時点の移行を伴う多くの小説において，移行した新たな時点から語られる内容のほとんどは，前の語りの時点から後に起こった事柄である。たとえば『異邦人』の前半はその日ごとの日記の体裁をとっており，次の日の日記は，前の日の語りの時点よりも後の，新たな一日の出来事を提示する。したがって，語りの時点の推移と連動して，語られる内容も推移していき，全体として筋が進展するというわけである。たしかに物語行為がそれ以降の物語内容に取りこまれるという干渉現象は起きるが，物語られる内容はそのつど新しく，物語られる内容どうしの干渉はおきない。これに対して『記念日』では，すでに述べたように，語りの時点が移行するのに伴って新たな出来事が報告されもするのだがそれと並行して，たえず，以前に振り返った過去の事柄の再説もおこなわれることが特徴である。すなわち，後でおこなわれる語りが，以前におこなった語りに対して，補足をおこなったり，疑問を呈したり，別の解釈を付け加えたりするため，断章相互間の語りの内容の干渉がきわめて大きくなる。新たな語りが行われるごとに，すでに語られた内容が更新され，また乱される。このいわば自己否定と自己革新の運動が語りのポジション移動に伴って展開されていくことが，『記念日』の挿入的な語りの特色であると言える。この手法によって，語り手によって語られる何ものも，もはや確実なものはなく，たえず更新の可能性にさらされた

「不確定性」のなかにあることが再び強調される。『記念日』は反復的な語りと語りの時点の移動とを駆使して，ものごとを語りながら，ものごとの不確定性そのものを提示するという逆説を展開し続けるテクストとしてある。

ここでさらに，この作品が，未来形をかなり頻繁に使っていることにも注目しておきたい。一人称の語りを採用し，そのなかで過去や現在に向けての叙述だけでなく，単純未来形や条件法現在形の動詞を用いた未知の未来についての瞑想を数多く取り入れて行くという叙法は, フェラウーンが前作『上り坂の道』で大いに試みた手法である。ジュネットが「前置的」な語りの事例としてあげるサン=タマンの『救われたモーゼ』でのように一定の長さをもつ物語がそっくり未来形で予示されるのではないが，単純過去形もしばしば用いられる『記念日』のテクストで，かなりの頻度で未来叙述が用いられているのは目を惹く特徴である。

三人称叙述の体制をとる第一部にも未来形は現れる。たとえば，1-(4) の末尾では, 単純過去形を用いて「5 月 13 日のアルジェリアの奇跡」に言及した後, 未来形を用いて次のように述べられている。「実際，その後，フランスの形相を変え changera，おそらくはその歴史の展開点を画することになるであろう marquera 奇跡である」(p.47)。この前置的叙述，とりわけ未来形におかれた二つ目の動詞については，この作品のカバーする物語世界の時間を超えた未来について述べる予報的な語りとなっている。この未来への志向は例外的な，偶然のものではない。

語り手=主人公の随想が記される第二部ではより頻繁に未来形動詞が現れる。まず第二部の 2 番目の断章である 2-II-(1) は未来形の文章で始められる(「私はフランソワーズに返事は書かない」Je ne répondrai pas à Françoise. p.65)。こうして，このテクストが二人の関係の過去を記述するだけでなく，語りの現在における進展を報告するとともに，たえず未来を気にかけ，未来に向けて思考をめぐらすものであることが示される。とくにこの断章の最後では未来形が連続して用いられている。「いろいろ考えた結果，私たちの物語のむしろ終着点でもあるこの始まり〔／冒頭部分〕を再録することにする。そのあとで，やはり私自身を弁護しまたフランソワーズの弁解をするために，私たちがどうやってそこにたどり着いたのかを説明するように努めよう。それが終われば，読者も私の女友達が戻ってくるのを，あるいは彼女からの手紙を待つだけということになろう。物語はこれからも続く——と思いたい。恥じらうこと

もうぬぼれることもなく，それをご報告することにする」[75]（p.67）。

語り手=主人公は，いったん終わったはずのフランソワーズとの関係が，終わってはいないのかもしれないという希望と自らの欲望とに突き動かされながら，自分たちの今後の進展を，あるいは架空の会話を，折に触れて夢想する。とくに前日，フランソワーズのアパルトマンに娘のリュシエンヌらしい姿が見えて，彼女が自分には告げずにアルジェにすでに戻ってきていることを知った 8 月 23 日の日付のある断章（2-IV-(1)）では，条件法現在形や単純未来形を，現在記述の現在形や過去に言及する過去形（複合過去形・半過去形）とときには一文の中で併存させながらしばしば用いている（たとえば「君は，君が何も要求したことはないと言うだろう」Tu me diras que tu n'as jamais rien demandé. p.105）かくして，過去や未来へと浮遊する精神運動の全体が語り手=主人公の現在を形作る。このテクストでは，断章ごとに語りの時点を移動させることで，語りの現在をテクスト全体の中で挿入的に位置づけるばかりでなく，個々のくだりの中でも過去や現在と，精神がときに差し向けられる未来とのあいだに語りの現在を挿入的に位置づける姿勢が観察できる。

この作品の終結部分，エピローグの末部で，動詞時制を多様に混在させながら，不可知の未来への志向のなかに語りの現在を位置づけているのは，したがって作品全体の帰結として必然的であったとも考えられる。フランソワーズとの一夜の 2 年後，すなわち 1960 年 12 月に，突如沸き起こった「アラブ人」民衆蜂起に言及し，とくに「像」statues などを破壊しまくる若者たちに向けて，語り手は自分を（フランスとの関係をある意味で受け入れた）旧世代の人間として規定しながら，こう述べてテクストを閉じる。

> ブラボー，若造たち。君たちは，これ以上私たちが騙され続けることはできない，というんだな。つまり君たち自身で，自分たちの像を創り上げて，みなに示すことに決めたんだな。まともであればいかなる人もこれを非難することはできないはずだ。君たちにはそれをやれる力があるのだから。すべてを破壊し，こわしてしまおう。そして何も後悔するまい。このとおり，私は君たちと心は一緒だ。けれど，ときどき疼く心の痛みは，君たちにはとうてい理解もできないだろう。なぜなら心が創り上げた像は，商人たちが一つ一つ破壊してしまったからだ。だが心が護り続けるそのイメージには，誰も手を出すことはできないはずだ。私は皆の幸運を望んでいる。君たちがこれまであまりにも苦しんできたことを私は知っている。さらば

フランソワーズ！　(p.170)

このくだりの直前で，「今，私には何が残っているだろうか」(p.169) と述べているとおり，語り手の精神的な位置は，過去と未来の両方のはざまにある不確定で不安な現在に置かれながら，過去を引き連れつつ未来へとすでに向かっているのだと読みとれよう。

6. 〈自己更新〉の文学

この作品が採用している，混乱したとも取られかねない極度に複雑な作品構成を上に分析したが，この非直線的な構成は作品の世界観そのものとむろん深く関わっている。以下にはこの論文の締めくくりとして，この作品がもつテーマ的特徴について，その動的な革新性に注目しながら考察したい。

1）価値の転倒

まず，『貧乏人の息子』でも顕著に見られたように，この作品では，通常の価値づけが意識的に転倒されている。冒頭，「山」から下に「降りてきた」主人公の移動は，カビリーのきれいな学校や整った設備，そこにいた優秀で素質のある生徒たちのもとを離れて，「悲惨」そのものであるような「醜い」貧困地帯へと落ちてきた転落として描かれている。しばしば野蛮と貧困の象徴とされるカビリー地方の方が社会および文化生活の面で，中心地である都会よりも高く，上に，位置づけられているのである。また，フランソワーズは結婚前，権威的な父親に，そしてさらに母親や兄弟姉妹たちにおとなしく従う個性のない娘として育ってきたことが示され，結婚は後見人を夫に変えただけだとされる（p.28）。アルジェリアのムスリム現地民社会よりも，むしろ旧弊で「動かない」immuable フランス人の「ブルジョア社会」（p.27）のなかに家父長制が根強くはびこっていることが指摘されているわけである。

主人公である現地民男性が「校長」として学校の「頂点」にあり，その下にフランス人教員たちが配属されているという構図も，作家自身の現実の経験を借りながら，植民地支配と被支配の関係を逆転させて提示する役割を果たしている。しかも，校長はむろんベテラン教員で，その恋の相手であるフランソワーズは，教育経験のまったくない素人の新米教員である。校長は彼女を教え導く立場であり，彼女は従い学ぶ立場にある。多くのフランス人がそうである

ように彼女はアルジェリアの状況には無知であり，アルジェにやってきて，ひたむきに少しずつ事態を学んでいく。こうした関係を象徴するかのように校長とフランソワーズの会話においても，フランソワーズは最後まで敬称の「あなた」vous を用い，また「ムッシュー」Monsieur という呼びかけを使って丁寧語で話すのに対し，校長の方は少し親しくなってからはややぞんざいに「君」tu で話しかけ，命令口調で話すことも多い。フランソワーズはその性格から，何度も「お転婆娘」gamine と形容されて未熟さが強調される。

こうした優劣や価値の逆転は，コロンである G 氏と校長の間でとくにはっきりとみられる。作中，保守性と男尊女卑は G 氏のもっとも際立った特徴とされ，文明の授け手であるフランス人たちが，常に旧弊さと女性差別を批判されるムスリムと比べて，果たしてこの点で開化しているのかが揶揄されている（p.95-98）。また，フランス人やヨーロッパ人あるいは世界の人々の一般的な意識では，おそらくヨーロッパ系の人間の方が，アプリオリに容姿も頭脳も品位も，現地民より優っているとされていることだろう。しかしこのテクストでは，校長は品性下劣な G 氏に比べ，自分の方が容貌も明らかに上だと述べている。自分の方が彼よりも顔立ちがよく，優しく知的なまなざしを持ち，髪も残っていて白髪も少ないとした上で，「こうした点ではっきりと私の方が優っていた」と断言している（p.100-102）。さらに彼は，こうした優越意識が嗤うべき嫉妬心からきたものであることを冷静に分析し，自己批判をおこなう能力を備えている。西洋人たち・コロンたちがどうしようもない「優等コンプレクス」（p.45）――これは「アラブ人が人種差別主義と呼んでいる」ものにほかならない，とされる――に侵され，自己批判意識を欠いているのとは違って，現地民である語り手=主人公の方が何重もの知的・精神的な成熟に達しているものとして描かれている。「若い」フランソワーズに対して，主人公がみずからの老いを確認するのもこの成熟の自負に裏打ちされてのことである[76]。

こうした価値の逆転は，単に被植民者の人権の主張をめざすものではない。このテクストはもっと深く，哲学的次元において，勝者と敗者，強者と弱者との関係の微妙な逆転可能性をたえず問うているのである。作品中では随所で校長がいかにフランソワーズに夢中であったかが述べられているが，一方，フランソワーズは「もう一人」の G 氏との二股の恋愛関係を進めていて，校長は恋の弱者である。しかしこうしたフランソワーズのふるまいは，校長との恋愛関係のなかで彼女を「偽善者」「裏切り者」として非難される立場にも置く。ときに校長は，自分ではなく，彼女の方が自分を求めてきたのだと主張するし，

実際どちらが相手を多く求めたのか，また，どちらが支配的な立場にあったのか，またどちらが本当の意味で優位だったと言えるのかは，何度も異なる見方が提示され，混沌として不明である。しかしとくに注目したいのは，エピローグで語り手=主人公が，自分から夢中になったがゆえに，自分の方が恋の能動的主体者であったと主張していることである。みずから彼女を求めた自分こそが，彼女から「愛をもぎ取った」のであり，この恋愛関係は自分が創り出したという意味で自分のものである。「私たちの愛は私の愛であって彼女のではない。愛は私から生じて彼女を通り過ぎ，彼女を引き連れて私に戻ってきたが，私が彼女を置いて出てきたあの朝，私は愛を持ち帰ってきたのだ。彼女には何も残してやらずに。」(p.167-168)。一見，恋愛ゲームの弱者と見えた彼は実は強者であり，いわば負けるが勝ちという人間的論理，そして「敗者」であることの価値が，鋭くここで提示されている。

さらに，一度きりの関係を結んだだけの彼は，これからフランソワーズがおそらく持つであろう数多くの，もっと熱烈な関係を重ねるかもしれない愛人たちと比べて，特権的に優位にあること，そうした男たちはどう頑張っても自分のコピーでしかないと彼は宣言する（p.168)。存在の反復性の感覚に裏打ちされた徹底して相対的な認識のなかから，新たな自負のかたちが示されていることに注意を払いたい。

2）自己の相対化——フランスとアルジェリアの間での立場選択

アルジェリアとフランスとの関係が，校長とフランソワーズとの関係およびG氏を含めた三角関係に象徴されていることは，述べるまでもないし，これを暗示するくだりを引用すればきりがない。このなかで，フランスとアルジェリアの関係がやや距離を置いた「友情」なのかそれとも「愛」なのか，「偽善」や「うぬぼれ」や「嘘」や「憎悪」がその間にどれだけ介在するのか，この恋愛はそれ自体が倫理に反するのかなど，暗喩されている問題は無数にある。コロンのG氏がもっとも邪悪な人物として設定され，彼がフランソワーズとも親密な関係を結んでいたもののついには彼女を捨て，コロンの立場をより強化するためにフランスに見切りをつけたかのように，パラをフィアンセとしていたスーダン女性教員と交際するようになるというのも，多くの状況的隠喩を含んでいるだろう。もともとフランソワーズは，突然やってきてそしていつか帰っていく人間として設定されており，校長とフランソワーズが書いた詩も，「君が出発し」「僕が一人残る」という内容を軸としていた（p.103)。そしてこ

の詩は，一人残るその後の状況が緑の木々に覆われたものか，それがまったくないのか，二つの正反対のケースが連ごとに記されたもので，先行きの不透明を暗示するものだった。小説の最後では，フランソワーズはすでに二年前に「決定的に」すなわち二度と戻らぬかたちでアルジェを去り，語り手=主人公はこの関係をすでに終わったものとみなしている。がむろん，エピローグの 1960 年末の時点ですらフランスとアルジェリアの離別は，現実には少しずつ色濃くはなりつつあったもののやはり潜在的可能性でしかなかった。

こうした状況の中で，主人公の校長は冒頭から「ハイブリッド」であると形容され，フランスとムスリム現地民側の両方の立場を自分の内に含む存在として提示され，そしてますます難しくなってくるその立場が説明されている。「学校は禁制の場となりフランス語は呪われた言語となり，教師は目を離さずに監視すべき疑わしい人物となった。教師は裏切り者ではないが雑種人間（ハイブリッド）だった。もう恨まれもしなくなり，端的にナイフか機関銃が，少なくとも監獄がふさわしい存在だった」(p.18)。そもそも学校というものが，フランスと現地民との軋轢の象徴の場であったが，今やはっきりとフランス人教師は子供にとって「敵」であり，フランス人教師たちにとっても生徒たちは「敵」の子供たちにほかならなかった（p.43)。この状況の中で，フランス学校の教師である現地民というのは，この対立する宗主国フランスとムスリム現地民とのあいだで，最も激しく引き裂かれる矛盾した存在である。言うまでもなくこれはフェラウーン自身の問題そのものである。しかもフェラウーンにとって，教育こそは人間の希望であり，社会を発展させる唯一の道だと固く信じられ続けてきた（その「教育」とは，コーランを暗記させるような種類の教育ではなく，広く世界中の知識を養い，自分で物事を考える力をつけるような教育，結局のところフランス式の教育ということになる)。このフランス学校の教師としての苦悶がこの作品を貫いている。

書き言葉としてはフランス語しかもたなかったフェラウーンにとって，フランス語という言語を用いることについての引き裂かれの感覚は薄いのではないかと以前に論じたことがあるが[77]，フェラウーンにとっての「引き裂かれ」の問題は，彼が学校教育のなかで自分の居場所を見出し，そしてとりわけ教師となった時点から深刻なものとして生じたように思われる。フランス教育のなかで自らを育んだ自分について，もっとも影響を受けたカビール人教師のことを思い起こしながら，彼は『日記』の 1956 年の記述のなかでこう言っている。「とても早くから彼は私に，フランスが私の養親国 ma patrie adoptive であり，

したがって私は面倒を見てもらっている幼い孤児（みなしご）であることを教えた。このことは私の心に多くの恥辱の念と温かい感謝とを植えつけた。そして私はフランス人少年以上に，フランスを愛したのであった」[78]。この養親たる「フランス」のもとで学ぶ学習者の人生の延長上で，教師として歩み始めたとき，彼は自分の教育活動に不可避的についてまわるさまざまな矛盾に直面することになった。『貧乏人の息子——カビリーの教師』（初出版）の第三部では，第二次大戦を迎え，このフランス学校の教師という立場がどれだけ彼を周囲の現地民から引き離すかが描かれていた。それとともに，一方で，植民地支配の非を厳しく咎めつつ，なおかつ，さまざまな側面でフランスに親愛の念を持ちフランスを通じて得られるものを貴重に思うような人間がどのような煩悶を抱え続けるのかが写し出されていた。フェラウーンのこの孤独と煩悶は，アルジェリア戦争が勃発してから一層深刻なものとなるのである。フランス学校の教師は，現地民たちからは「フランス側」の人間とみなされてしまう。しかしフェラウーンは，植民地行政に加担する議員となったりフランス外務省に入って本国の官吏となったりすることを敢然と拒んだことにも示されるように，あくまでアルジェリアの現地民として自分たちの未来のために生きることを選び，ムスリムの子供たちの教育に資することを自分の使命としていた。フェラウーンにおける引き裂かれの問題は，戦争下の記録である『日記』とこの小説『記念日』を通して，より詳細に検討する必要があるだろう。これは今後の課題としたい。

作品に戻ろう。注意したいのは，主人公の困難な立場とそれにまつわるさまざまな懊悩や苦難が描かれているとしても，このハイブリッドであるとされる主人公は，何も立場が決まらず曖昧なままにとどまるのでもなければ，二つの異なる立場の間を揺れ動くのでもないことである。

作品で主人公の校長と，校内のフランス人教員たちとの対比や対立が強調されているように，語り手=主人公は現地民としての立場をあくまでも自覚的に維持する（彼が「私たち」と呼ぶのはカビリー人などとアラブ系住民を合わせたムスリム現地民全体のことであり，この現地民から見たフランスの横暴が冷徹なまでに分析されている）。まずこの点を確認しておきたい。

しかしそれでいて校長は，排他的・対抗的に現地民の立場を誇示しようとするのではない。校長は相手側の理屈も理解しようとし，相手側の立場になって考えることもする。フランソワーズは植民地支配側の人間であるが，彼女もまた主人公と同じく相手側に寄り添う姿勢を持つ人間であることが作品の冒頭から示されていた。第二部の回想の中でも，校長とフランソワーズが「アラブ人」

と「フランス人」の間の問題について激しく議論し合い，立場と意見が全く違うことを認めつつも，ともに「お互いを理解しようとし」たことが記されている。「私はフランス人たちの立場に身を置いてみようとしたし，彼女はアラブ人たちの立場に立ってみようとした」（p.115）という。FLN の「テロリスト」たちの横暴や暴力にも手厳しい批判を加える彼は，何らかの陣営を選んでそのすべてを正当化するような一元的な視点を最も強く拒否する。語り手=主人公は自分のあり方や判断の責任は引き受けながらも（彼はたえず自分が殺されるかもしれないと覚悟している[79]），自己に疑問を呈し，自己を相対化する視線を忘れまいとする。おそらくはほとんど誰からも理解してもらえない，孤独だが成熟した主人公のあり方を，この小説は丁寧に描き出そうとしている。

『記念日』のエピローグでは，既にみたとおり，語り手は自分が愛した「像」はすでに消失し，またこの愛は若い世代から理解されるはずのないものであることを認め，自分もこの愛に別れを告げるのであるが，だからといってこの「像」を愛したことを否定することだけはしない。それは本文中で，フランソワーズとの関係として語られているように「罪深い愛」amour coupable（p.78）であったかもしれない。そしてこの愛は「私に重くのしかかり，そこからどうしても私が逃れることができない」（p.104）もので，またこれからも「絶対に忘れたくない」（p.105）ものであり続けるであろう。しかし彼自身がこの憎らしくも恋しい相手と別れることを選んだのである。

フランスをめぐる実に複雑なフェラウーンの心情と立場がこの作品を成立させていることは明らかである。フェラウーンはフランスを愛したみずからを過渡的な存在と認め，自分が人々から理解されたり肯定されたりするはずのない人間であることを認めつつ，だからこそ，このようなあり方をする人間にしか見えないものを作家として提示しようとしたのだと思われる。自己像を，三人称と一人称の両方を駆使しながら，小説化して描き出すフェラウーンの姿勢には，『日記』でのように自分の立場からものを言い考えるだけでなく，自分の立場そのものを材料として相対化し，この作業を通じて人間と社会について考えようとする，自己に対する批評的距離も鮮明に感じ取れる。

3）自己像の変革

この小説が，『クレーヴの奥方』にも比される既婚者どうしの恋愛をモチーフとしているのは，もちろんフランスとアルジェリアの関係の比喩としてでもあろうが，フェラウーンの文学世界に貼りついたイメージを一新し，フェラ

ウーン自身に押し付けられた固定したレッテルを覆すことも目的であったと思われる。

これまでフェラウーンの描く学校の世界は，貧困や無理解やライバル心などが渦巻く場ではあっても背徳からは縁遠い舞台であった。実は，それまでもフェラウーンの小説では男女関係がさまざまなかたちで触れられていて，『貧乏人の息子』（初出版）ではカビリー地方の奔放な若者たちの性の学習の仕方や男性を誘惑することで生き抜く女性のことが語られていたし，『土地と血』において出稼ぎ移民先の北フランスの炭坑で主人公アメルの伯父が死亡するのは下宿の女主人をめぐる三角関係が原因だった。『上り坂の道』でも横恋慕や嫉妬を含めほかにも種々の複雑な男女関係が採りあげられていた。しかし主人公男性が，熱烈な，しかも不倫の恋におぼれるという設定は初めてであり，恋愛関係そのものが物語の中心に据えられるのも，また，キスや抱擁程度ではあっても男女の接触のシーンがまざまざと描かれるのも，フェラウーンの作品を読みなれた読者にとっては意外の感に打たれることであるだろう。しかも学校の校内でおこなわれるこれらの行為は，いささかショッキングなものでもあるにちがいない。少なくともこの作品だけはアルジェリアの小中学校の教科書に掲載するには不向きであるだろう。

現実世界においても小説の伝統からしても，おそらく，たわいのないと形容するべきこうした倫理に反する行動が，マグレブの文学や，フェラウーンの文学の場合に引き起こす驚きをフェラウーンは十分に意識していたと推察される。その上であえて，自己像を転覆するために，彼はこうしたシーンを描いたのだと思われる。小説中には，G 氏が，勝手にこしらえた既成の型を主人公に当て嵌めたがっていることを批判して，語り手=主人公が以下のように述べるくだりがある。

> こうして彼は私を大いなる原理の中に閉じ込めた。いわく，私は真面目で冷静な堅物で，教育者という気高い務めに全身を捧げ，浮ついた感情には無縁で，人によっては人生の味わいそのものであるあのわずかな狂気や気まぐれが一切訪れるはずもない人物だというわけだ。(p.93)

ここに記されているのはまさしく，読者がフェラウーンを遇する態度の揶揄でもあるだろう。そしてさらに語り手=主人公は議論を展開して，立派な台座の上に載せることで自分を遠ざけようとする G 氏の態度に逆らって，「私は，彼

が根拠もなく私に押し付けようとする「よき野蛮人」や大教育者の役割を拒んだ」（p.94）と説明している。尊敬され良い評判をとるかどうかではなく，あくまでもレッテルから自由な個人であることを目指すのである。この小説においては冒頭から，たとえば「大伽藍の底辺」といった言葉で喩えられていたように，すべてがどん底に行きついた状態にあり，主人公が「癒すことの不可能な絶望」（p.15，p.23）のただなかにいることが強調されていたが，まさにそうした状況の中でたえず「ゼロから再出発すること」（p.22），自己の更新こそが企図され続けるのである。

フェラウーンのみるところ，アルジェリアの現地民にとってはもはや独立は――たとえ実際には不可能かもしれなくても，あるいはそれが政治的に正解かどうかはわからなくとも――それ以外にはありえない選択肢となっていた。エピローグではこう述べられている。

> 私は，見たところ非常に単純な問題に対する彼ら〔＝植民地支配を肯定するフランス人たち〕の間違った解決策を認めるわけにはいかなかった。これまでにもましてフランス人たちにとっては，あらゆる反対を押しつぶしてアルジェリアを保持することが問題になっていた。私たちにとっては自分たちの自由を取り戻し，自分たちの場所の主（あるじ）となることが問題だったのだ。（p.166）

だが，どうやったらその自由の取り戻しに行きつくのか，どうやって本当の主として自分たちが自分たちの場所で生きていくことができるのか，それは未知数であった。しかし未知数であることはこの決断をなんら揺さぶることはない。逆に言えば，未知の事態を怖れるという選択肢だけはないことを，フェラウーンは強く訴えようとしているように思われる。

時間構造の分析で明らかにしたように『記念日』は，執拗に過去を回顧し直しながら，過去も未来もなんらかの確固とした真実に支えられているものではないことを明らかにする。そして主人公と読者の意識を，象徴的なばかりに状況のさなかに挿入的に位置づけ，この不安定な現在（「動く地面」terrain mouvant, p.113）に生きることを決然と肯定する。作中にもフランソワーズとのやりとりの回想として以下の表現がある。「私たちはまた，過去も未来も人間には属さない，とだけ言いあった。私たちはひたすら現在にもてあそばれ

る存在 jouet du présent だ，と」(p.113)。もてあそばれつつ，何度でもゼロから再出発すること，歴史の中でのこの永久の自己更新こそ，硬直することのない未来へとつながる，絶望のなかでの唯一の希望の道であるだろう。

回想のやり直しは過去への回帰ではなく，回想する現在の主体の肯定である。自己像や自分の記憶すらも更新し直して，未知の未来へと向き合おうとするこのテクストの姿勢は，依拠するべき根拠を求めるのとは反対に，自己否定をも恐れず自己そのものを変容させ続けて行くフェラウーン文学のダイナミズムを提示しているように思われる。

参照文献

Chèze (Marie-Hélène), *Mouloud Feraoun, La voix et le silence*, Paris: Seuil, 1982

Déjeux (Jean), *Littérature Maghrébine de langue française*, Sherbrooke (Canada) : Naaman, 1973

————, *La littérature algérienne contemporaine*, coll. Que sais-je?, Paris: PUF, 1975

Elbaz (Robert) & Mathieu-Job (Martine), *Mouloud Feraoun, ou l'émergence d'une littérature*, Paris: Karthala, 2001

Feraoun (Mouloud), *Le Fils du pauvre; Menrad, instituteur Kabyle,* Le Puy : Cahiers du nouvel humanisme,1950; *Le Fils du pauvre,* Paris: Seuil, 1954. 英訳 *The Poor Man's Son: Menrad, Kabyle Schoolteacher*, translated by Lucy R. McNair, introduction by James D. Le Sueur, Charlottesville (US) & London: University of Virginia Press, 2005

————, *La Terre et le sang*, Paris : Seuil, 1953

————, *Jours de Kabylie*, Alger : Baconnier, 1954; Paris : Seuil, 1968

————, *Les Chemins qui montent*, Paris : Seuil, 1957

————, *Les Poèmes de Si Mohand*, Paris : Les Éditions de Minuit, 1960

————, *Journal: 1955-1962*, Paris : Seuil, 1962. 英訳 *Journal 1955-1962 : Reflections on the French-Algerian War,* edited by James D. Le Sueur, translated by Mary Ellen Wolf and Claude Fouillade, Lincoln: University of Nebraska Press, 2000

————, *Lettres à ses amis*, Paris : Seuil, 1969

————, *L'Anniversaire*, Paris : Seuil, 1972

————, *La Cité des roses*, Alger: Yamcom, 2007

Gleyze (Jack), *Mouloud Feraoun*, Paris : L'Harmattan, 1990

Les cahiers de L'Express, hors-série, « 1954-1962 La guerre d'Algérie, L'Histoire et la mémoire », mars-avril 2012

青柳悦子『デリダで読む『千夜一夜』——文学と範例性』新曜社，2009 年

————「ムールード・フェラウーン『貧者の息子』にみる間主体性——テクストの反語性と新たな人間観の提示」，『文藝言語研究　文藝編』第 61 号（筑波大学

大学院人文社会科学研究科文芸・言語専攻），2012 年
アレッグ（アンリ）『尋問』長谷川四郎訳，みすず書房，1958 年（Henri Alleg, *La Question*, Les Éditions de Minuit, 1958）
ジュネット（ジェラール）『物語のディスクール――方法論の試み』花輪光・和泉涼一訳，書肆風の薔薇，1985 年（Gérard Genette, *Figures III*, Seuil, 1972）
ストラ（バンジャマン）『アルジェリアの歴史――フランス植民地支配・独立戦争・脱植民地化』小山田紀子・渡辺司訳，明石書店，2011 年（Benjamin Stora, *Histoire de l'Algérie coloniale 1830-1954*, La Découverte, 1991, 2004; *Histoire de La guerre d'Algérie*, La Découverte, 1993, 2006; *Histoire de l'Algérie depuis l'indépendance*, La Découverte, 1994, 2004）
デリダ（ジャック）『シボレート――パウル・ツェランのために』飯吉光夫・小林康夫・守中高明訳，岩波書店，2000 年（Jacques Derrida, *Schibboleth : pour Paul Celan*, Galilée, 1986）
ペルヴィエ（ギー）『アルジェリア戦争――フランスの植民地支配と民族の解放』渡邊祥子訳，文庫クセジュ，白水社，2012 年（Guy Pervillé, *La Guerre d'Algérie*, coll. Que sais-je?, PUF, 2007）
マムリ（ムールード）『阿片と鞭』菊池章一訳，現代アラブ小説全集 10，河出書房新社，1978 年（Mouloud Mammeri, *L'Opium et le bâton*, Plon, 1965）

＊本論文は，平成 22-25 年度文部科学省科学研究費基盤研究 (C)「アルジェリアの現代文学状況」（代表・青柳悦子）の補助を受けた研究成果の一部である。

注

1　本論文は 2012 年 5 月 17 日にアルジェリアのオランでおこなった口頭発表 « Sur *La Cité des roses* (dite *L'Anniversaire*), l'œuvre posthume de Mouloud Feraoun; les jeux de temps dans le texte », The 2nd Algeria-Japan Academic Symposium, 17 May 2012, at University of Science & Technology of Oran Mohamed Boudiaf in Oran (Algeria) の内容およびその論文集に投稿した原稿に大幅な加筆修正をおこなったものである。また「Journée Mouloud Feraoun：ムールード・フェラウン没後 50 周年記念シンポジウム」（2012 年 12 月 1 日，早稲田大学早稲田キャンパス）でおこなった口頭発表「遺作小説『記念日』――〈自己変革〉の文学として」も，この論文の骨子を発表したものである。

2　マグレブ文学研究の泰斗であるジャン・デジューは，たとえば『フランス語マグレブ文学』のなかで，フェラウーンを代表として 1950 年代のマグレブ文学の特徴を「〈民族誌的（エスノグラフィック）な〉文学〉と規定するとともに，「フォークロア的，地方主義的」なテーマをその共通点として指摘した（Jean Déjeux, *Littérature Maghrébine de langue française*, Sherbrooke (Canada)：Naaman, 1973, p.37 ほか）。この見解は現在に至るまでマグレブ文学の基本理解として定着している。

3　ジャン・デジューは広く読まれるクセジュ文庫『現代アルジェリア文学』のなかで，1975 年までに刊行されているフェラウーンの全作品を視野に入れつつも，総括としてフェラウーンを「シンプルでやさしい文体の」「単線的な書きぶり」の作家と評している（Jean Déjeux, *La littérature algérienne contemporaine*,

coll. Que sais-je?, PUF, 1975, p.64)。しかしながら，たとえば『土と血』，『上り坂の道』は，あきらかに暗喩性とアイロニーに富んだ文体で書かれ，複雑な構造でテクストが構成されている。デジューの偏った姿勢が，あえてこの作家を単純化する評言を選び取らせたのだと思われる。なお，『貧乏人の息子』のテクストにも多くの陰影と複雑なヴィジョン，そして非単線的な性質が含まれていることは，以下の論文で論究した。青柳悦子「ムールード・フェラウーン『貧者の息子』にみる間主体性——テクストの反語性と新たな人間観の提示」，『文藝言語研究　文藝編』第 61 号（筑波大学大学院人文社会科学研究科文芸・言語専攻），2012 年。この論文との相違として，本論文では，*Le Fils du pauvre* の日本語題名として,『貧者の息子』よりもより柔らかい表現である『貧乏人の息子』を採用したことを付言しておく。

4　評伝的作品研究を著したジャック・グレーズは，フェラウーンは『日記』を書く以前は「作品のなかで，ほとんど過去しか書いてこなかった」としている。Jack Gleyze, *Mouloud Feraoun*, L'Harmattan, 1990, p.87.

5　『日記』の編者エマニュエル・ロブレスによる序文の最後につけられている注では，「ムールード・フェラウーンは私にカット coupures を依頼していた。〔…〕ここに提示するのは〔この「日記」の〕全テクスト le texte intégral であり〔…〕」とやや矛盾した説明がなされている（Feraoun, *Journal*, p.9)。フェラウーンの息子ラシード・フェラウーンによればこのスイユ版は不完全なもので，ラシードは削除された記述を入れ直して『日記』を再出版したいとの希望を表明している（HP：Kabyle.com。2007 年 3 月 6 日のインタビュー。http://www.kabyle.com/archives/Rachid-FERAOUN-La-Cite-des-Roses.html)。フェラウーンは『日記』の原稿をロブレスに渡してほどなく亡くなってしまったので，上記のロブレスによる記述は，具体的には自分の判断でおこなった数々の削除が，生前作者から任されたものであったとする断り書きだと読める。読者･研究者としては，削除部分を復元した完全版の刊行が心待ちにされるところである。

6　編者のロブレスはあくまでも，フェラウーンが『貧乏人の息子』の来るべき続編のために準備してあった原稿として紹介している。Cf. Feraoun, *L'Anniversaire*, p.4（編者による序文）.

7　Feraoun, « Images algériennes d'Emmanuel Roblès » (初出はアルジェリアのオランの雑誌 *Simoun*, n° 30, décembre 1959), in Feraoun, *L'Anniversaire*, p.60.

8　Marie-Hélène Chèze, *Mouloud Feraoun, La voix et le silence*, Seuil, 1982, p.122 (*Le Monde*, 7 novembre 1962 に掲載された P.-H. Simon の記事からの引用)。なお，現地民教育の推進を，フランス人と現地民との協力のもとにおこなう「社会センター」Centres sociaux（設立者はアルジェリアに深い関心を寄せたフランス人人類学者ジェルメーヌ・ティヨン）は，FLN からの批判も受けていた。親仏知識人としてフェラウーンが FLN 側から命を奪われる可能性もあったことは否定できない。

9　たとえば 2012 年のアルジェ書籍市（SILA: Salon international du livre d'Alger）は,「殉教作家たちへのオマージュ」Hommage aux écrivains martyrs を掲げ，フェラウーンと，1956 年にコンスタンチーヌで犠牲となったアフメド・レダ=フフ Ahmed Redha Houou を追悼した。

10 Feraoun, *L'Anniversaire*, p.8, note.

11 2007 年に『薔薇学園』が出版される前は仕方のないことであるが，研究者のあいだでもフェラウーンが 1958 年から 59 年にかけて書いた作品についての情報と，スイユ社から公刊された死去直前の未完原稿とは混同され，混合されて論じられてきた。たとえば以下がその例である。Jack Gleyze, *op.cit.,* pp.81-86.

12 フェラウーン文学のもっともすぐれた研究書であると思われるエルバスとマチュー=ジョブの著作では，こうした複層的な声の絡み合いに着目して，「ラディカルな不調和を呈する多声性」をこのテクストに見出している。フェラウーン文学の主人公たちは「変幻自在」protéiforme な存在で「デカルト的主体ではありえない」とこの著作は喝破しているが，そうした変容し続ける非単線的存在の複雑化した形象が，この最後の作品でも新たな仕方で探究されていたと理解される。Robert Elbaz & Martine Mathieu-Job, *Mouloud Feraoun, ou l'émergence d'une littérature*, Karthala, 2001, p.128, 104.

13 フランス統治時代に「現地民」indigènes と呼ばれた，ヨーロッパ系移民とその子孫以外の人々は，「ムスリム」という言い方で呼ばれたり，「アラブ人」と総称されたりもした。むろん現地民のほとんどがイスラーム教徒であり，またアラブ人がそのマジョリティを占めるとしても，少数ではあれイスラーム教を信仰しない現地民もいたし，またそれよりもはるかに多い人数のアマジク（ベルベル）系の人々，すなわちアラブ人ではない人々がいたことには注意したい。

なおアマジグ系の一民族であるカビール人のフェラウーンは，カビリー地方在住時代は自身をアラブ人との対立関係で意識することが多かったように思われるが，本論文でも見るように，独立運動の過程で，フランスとの対比で言えば自分を広く「アラブ人」という呼称のなかに含めることを，おそらく違和感を保持しつつも，容認するようになってくる。

14 『日記』の 1961 年 9 月 26 日の記述には，「もうすぐ，すべてが終わる，という気配がする。だがどんな終わり方か？」との記述がある（Feraoun, *Journal*, p.338）。フェラウーンは独立を是としていたが，独立それ自体を目的とする運動に加担せず距離をとっていた。その一方で早くから独立の仕方，独立後の社会のあり方について，問い続けていた。

15 Feraoun, *La Cité des roses*, Alger：Yamcom, 2007. フェラウーンのこの小説作品からの引用については，本文中にページ数のみを記すこととする。

16 フェラウーンは 1958 年 9 月の，アルベール・カミュ宛の公開書簡で「私たちみなが今はまりこんでいる，計り知れないトンネルの出口が，私たちには見えないでいます」と述べている。ただしフェラウーンは，カミュの態度を，フランス人たちの姿勢を非難はするがけっしてアルジェリア現地民を勇気づけるのでもない否定的態度として批判している。Feraoun, « La source de nos communs malheurs (lettre à Albert Camus) », in Feraoun, *Anniversaire*, p. 35-44, esp. p.43（初出は，雑誌 *Preuves*, n°91, septembre 1958）。

17 「これらのページは，ムールード・フェラウーンが，1961 年の終わりに着手したある小説,『記念日』, の 4 つの章である」。この説明文では「ある小説」と「『記念日』」が並列されているが，これらを同格として提示する根拠は明示されてはいない。Feraoun, *L'Anniversaire*, p.7, note.

18　Feraoun, *Lettres à ses amis*, p.152.
19　*Ibid*. p.170.
20　HP：Kabyle.com。2007 年 3 月 6 日のインタビュー。URL 前掲。
21　Feraoun, *La Cité des Roses*, p.8（刊行者の序文）。ラシードはこの作品の（エピローグを除く）完成時期を小説本文に記された日付そのままに，1958 年末と考えている。
22　デリダはパウル・ツェランにおける日付の主題を論じながらこの問題に繰り返し言及している。「例えば——一月二十日というのがあった。このような日付は唯一無二の，反復を免れたものとして書かれ得たということになろう。とはいえこの絶対的な固有性（プロプリエテ）は，同時にまたその絶対的な特異性において転記され〔…〕反復されもするのだ。」「いくつかの特異な出来事が同じ日付の中で縁組し，同盟し，集中し得るのであり，その同じ日付はしたがって同じでありながら別の日付，同じ日付としてのまったく別の日付になり〔…〕」など。ジャック・デリダ『シボレート——パウル・ツェランのために』飯吉光夫・小林康夫・守中高明訳，岩波書店，2000 年，p.16，25。この著作にみられる，反復可能性と特個性との逆説的な関係をめぐるデリダの思考については以下で論じたことがある。青柳悦子『デリダで読む『千夜一夜』——文学と範例性』新曜社，2009 年，p.113-126（第 I 部第二章第二節「「一」の反復可能性——『シボレート』」）。
23　2012 年 12 月 1 日のフェラウーン没後 50 周年記念シンポジウムの折に，この作品が最終的に強調する日付が，公的・歴史的な日付よりも，主人公たちの私的なものであるとの指摘を受けた。たとえば 11 月 1 日（FLN が現在でも建国記念日よりも重視する独立運動勃発の日）や 1958 年の 5 月 13 日といった公的に記録されていく日付ではなく，フェラウーンがこの歴史的状況の中を生きる匿名の一般市民の日常の日付を重視したことは重要だろう。戦争は歴史に残るが，戦時下を生きた人々の日常や，その日常の中での苦悩のほとんどは歴史には残らない。しかし，あらゆる人間が私的な「記念日」によって人生を支えていることをこの作品は強く意識し，そこに光を当てることによって，さまざまな公的記念日となる諸事件のただ中で，あるいはそのはざまで，個人の生を奪われてきた声なき人々の存在を，文学の中で照らし出そうとしたのではないだろうか。
24　この「テロ」は，反植民地活動がやや沈静化したと思えた時期におこったもので，フランスにとっては「晴天の霹靂」だったとされる。アルジェリア領の 30 ほどの地点で 70 件におよぶテロが，10 月 31 日の深夜から翌日にかけて，組織的に同時展開された。これによるフランス側の被害は比較的小さく，フランス人および「ムスリム・フランス人」（民族的出自は現地民であるがフランス側についていた人々）などを含めて，死者は 9 名，負傷者は 3 名とされる。ギー・ペルヴィエ『アルジェリア戦争——フランスの植民地支配と民族の解放』渡邊祥子訳，文庫クセジュ，白水社，2012 年，p.56，ほか。また「それまで知られていなかった組織」（FLN を指す）によるこの蜂起とその前後の状況については以下に詳しい記述がある。バンジャマン・ストラ『アルジェリアの歴史——フランス植民地支配・独立戦争・脱植民地化』小山田紀子・渡辺司訳，明石書店，2011 年，p.196-208。

25 ペルヴィエ，前掲書，p.65。

26 ストラは，ムスリムの若い「直接行動主義者」たちとフランス側との武力的衝突が「真の戦争としての様相をあからさまに呈するようになる」転期として，1955 年 8 月 20 日にコンスタンチーヌ県北部で起きた，ALN 戦士数名に率いられた数千人の農民による蜂起を重視している。フランスは直ちにこれに対処するため除隊したばかりの 6 万人を再招集して軍備を増強し，徹底した弾圧を加える。その結果国際的な関心が誘引され, 9 月末には国連で「アルジェリア問題」が上程されることになる。ストラ，前掲書，p.214-216。また，ペルヴィエによれば,「アルジェリア戦争」の語が広く使われ始め，フランス人一般がこの問題に関心を持ち始めるのは，FLN の武力蜂起から 1 年後あたりからであるという。ペルヴィエ，前掲書，p.65。ちょうどフェラウーンが『日記』を書き始める時期である。

27 FLN が「闘争への無関心は罪であり，作戦への妨害は裏切りである」という標語をかかげて施行していた「独自の戒厳令」（同書, 60 ページ）の実情について，フェラウーンの『日記』から多くを知ることができる。

28 SAS は，1955 年にフランスが，オーレス地方やカビリー地方に創設した植民地支配の末端組織で，現地民を登用して村の警護や諜報活動にあたった。

29 もともとフランス本土のフランス人たちはアルジェリアの維持に熱心ではなく，1957 年 7 月にはすでにその 50％以上が FLN との停戦を望み，アルジェリアの自治ないし独立国家樹立を容認していたという。同書, p.80。なおストラ, 前掲書, p.290-292 も参照のこと。またストラはこの戦争に対してフランス人が一般に奇妙なほど無理解と無関心のうちにとどまったことを指摘し，その理由を以下のように説明している。「〔フランス〕社会は戦争状態にあると自認することを拒否した。フランスの大衆は，一九四四年の自国の解放に全力を尽くした自分たちの国が，抑圧し，拷問を行う立場にはなり得ないという精神的な確信の背後に避難したのである」（同書，p.293）。アルジェの戦いにおけるフランス側の過酷な拷問を告発したアンリ・アレッグの『尋問』（*La Question*, 1958；邦訳，みすず書房，1958 年）が発売直後に発禁処分となったことは，こうしたフランス社会の傾向を典型的に示している。

30 ペルヴィエの紹介によれば，フランス政府と停戦協定の交渉をおこなったのは，アルジェリアの一政党にすぎない（ペルヴィエ，前掲書，p.128）。すなわちアルジェリア臨時政府は現地民の創意を代表するものとはみなし得ないとの意見であるが，FLN 側はあくまで，二つの「政府」間の交渉であるとしてきた。

31 アルジェリアには 1848 年から，アルジェ，オラン，コンスタンチーヌの 3 県がおかれてきた。1902 年には「県」とは別格の「南部領土」が加わった。1955 年にボーヌ県が追加され，さらに 56 年に 8 県，57 年にサハラの 2 県，58 年に 3 県が加わり，59 年に 2 県が削除された結果，独立時には 13 県とサハラの 2 県が存在した。独立戦争中に，フランス政府によるアルジェリア現地民対応が緻密化されたことが伺える。

32 首相であったド・ゴールは，大統領の権限を大幅に拡大した新憲法を掲げて国民投票に問うた。ド・ゴールはアルジェリアのすべての住民，すなわちこれまで「現地民法」によって権利を制限されてきたムスリム現地民にも，完全な市

民権を与えるという構想を持ち，これによって紛争を解決することを考えていた。だがこの案は植民地主義者からも，またいまや明確に「独立」を求めるアルジェリア現地民側からも受け入れられなかった。ド・ゴールの姿勢はあやふやに揺れ動いていく。

33 アルジェリア現地民の死者は 25 万人から 40 万人，うち「闘士・叛徒」が 14 万～ 15 万人だったと推定されている。すなわち革命闘士ではない一般現地民の犠牲者が 10 万～ 25 万人に及んだことになる。他方，フランス側では，兵士 28500 人，現地民補充兵（ハルキ）3 万～ 9 万人，ヨーロッパ系市民 4000 ～ 6000 人の犠牲者が出たとされる。フランス軍兵士を除けば，戦争の被害者は，数すらも不明であり，このこと自体が，生じた事態の悲惨さを語っている。フェラウーンが絶えず見続けたのは，この正確にカウントすらされない犠牲者たちの生である。

34 フランス本土では 4 月 8 日，アルジェリアでは 7 月 1 日に改めてアルジェリアの独立を信任する国民投票が行われ，独立が承認された。かくして 1962 年 7 月 5 日，アルジェリアは独立を宣言した。

35 Feraoun, *Journal*, p.11.

36 *Ibid.*, p.91.

37 ペルヴィエ，前掲書，p.130。

38 同書，p.139 参照。

39 フェラウーンは，1961 年の夏からこの日記の刊行の手立てを考え始めたが，どうやって秘密裏に，そして無事にパリへ 2 ダースにものぼるノートを送るかが問題であった。この原稿が彼の命を危険にさらすものであることは彼自身十分に認識していた。フェラウーンはフラマン宛の手紙で，「もし内容が文学的に優れ，人類にとって有益であるなら——私の危険はかまわないので——」，と彼のもとへ送付できた際の処置を頼んでいる。Feraoun, *Lettres à ses amis*, p.188（1961 年 8 月 6 日付）。

40 Feraoun, *Journal 1955-1962 : Reflections on the French-Algerian War*, edited by James D. Le Sueur, translated by Mary Ellen Wolf and Claude Fouillade, Lincoln: University of Nebraska Press, 2000

41 『アルジェの戦い』（*La battaglia di Algeri*），1966 年，イタリア映画。

42 『記念日』の G 氏は，UT の士官 officier であるとされている。

43 6 月 4 日，アルジェリアを訪れたド・ゴールは，いくつかの都市をまわってコロンたちに « Je vous ai compris » と発言した。「フランスのアルジェリア」を維持するとの政治宣言だと当然受け取れるものである。

44 12 月 9 日からのド・ゴール大統領のアルジェリア訪問を機に，再びコロンたちによる反政府運動が「フランスのアルジェリア！」の叫びとともに高まった。その直後，「アルジェリアのアルジェリア」「ムスリムのアルジェリア」を唱え，現在の国旗につながる緑の旗を掲げて，ほとんど自然発生的にアルジェの現地民民衆が路上に繰り出した。映画『アルジェの戦い』のラストシーンで描かれているのは，この民衆蜂起のさまである。しかし一般に，フランスでのアルジェリア戦争の記述では，言及されることがきわめて少ない事件でもある。2012 年には春から（とくにエヴィアン協定 50 周年を記念して）フランスの多くの

雑誌がアルジェリア戦争特集を組み，詳しい回顧をおこなったが，1960 年 12 月のこのアルジェリア民衆蜂起に触れたものはきわめて少ない。たとえば雑誌 *L'Express* のアルジェリア戦争特別号でもまったく触れられていない（*Les cahiers de L'Express*, hors-série, « 1954-1962 La guerre d'Algérie, L'Histoire et la mémoire », mars-avril, 2012）

45 Mouloud Mammeri, *L'Opium et le bâton*, Plon, 1965（邦訳，ムールード・マムリ『阿片と鞭』菊池章一訳，河出書房新社，1978 年）。映画は小説と同題名で，アフメド・ラシュディ Ahmed Rachedi 監督により 1969 年に制作され，1971 年に公開された。原作小説とは異なってアラビア語による作品であり，アルジェリア映画の古典として知られている。アルジェリアでは比較的容易に（海賊版）DVD を入手できるほか，インターネット上で鑑賞することもできる。

46 フェラウーンはしばしば自分たちアルジェリア現地民が「敗者」であることを強調し，むしろそこに自負すらも見出していた。たとえばカミュ宛の公開書簡で，植民地支配の歴史を振り返り，自分たちを「敗者」の言語しか持たない者としつつ，逆に「勝者」vainqueurs の言語しか持ち得ないフランス人の不幸な限界を明るみに出している（Feraoun, « La source de nos communs malheurs (lettre à Albert Camus) », in Feraoun, *Anniversaire*, p.37）。『記念日』の中でも，主人公の思念として，フランソワーズの夫と自分を引き比べて自分の抱いている悔恨を「敗者」のそれであると説明している（p.104）。

47 Feraoun, « La littértaure algérienne »（初出は雑誌 *Revue française*, 3e trimestre 1957, Paris), in Feraoun, *L'Anniversaire*, p.58.

48 ただし，1958 年 4 月まで。ロブレスは息子を，息子自身による銃の暴発事故で亡くし，その失意の中でフランスに転居する。

49 Feraoun, *Journal*, p.251（1957 年 10 月 21 日）。アルジェリア現地民に対する融和策として，この時期，教育の拡大が大規模に進められた。『記念日』でも，「大規模な就学促進計画が施行されて」（p.29）という記述がある。

50 『日記』には，15 の教室，21 人の教員で，28 クラスを運営することになり，そのスケジュールを組むのに大変フェラウーンが苦労したことが記されている。*Ibid*.

51 *Ibid*., p.278-279（1958 年 9 月 27 日）。

52 *Ibid*., p.287-288（1958 年 12 月 28 日）。

53 この事件については『日記』で何度か言及されていて，フェラウーンが衝撃を受けていたことが伺える。Cf. *Ibid*., p.263, 265（1958 年 1 月 25 日，2 月 9 日）。

54 Feraoun, *Lettres à ses amis*, p.209.

55 *Ibid*., p.141-142.

56 *Ibid*., p.142-143.

57 *Ibid*., p.149.

58 *Ibid*.

59 *Ibid*., p.151-153.

60 ラシード・フェラウーンのインタビューによると，フラマンからの手紙では「映画的なスタイル」にし，「つかのまの出会い」を描く，「ラファイエット夫人には思いもよらぬ状況でのカビリー版『クレーヴの奥方』」にすることが求められ

ていたという。(HP：Kabyle.com。2007 年 3 月 6 日のインタビュー。URL 前掲)。フェラウーンの返答と合わせて考えれば，フラマンとしては深刻さのない，また倫理的に容認できる範囲の淡い出会いとすることを求めたということか。

61　ロブレスは，左翼的思想をもつアルジェリア在住のフランス人作家たちを中心とする「アルジェリア自由主義者連合」La Fédération des libéraux d'Algérie（1956 年 6 月創設）に属していた。このためロブレスの新聞 *Espoir-Algérie* は「ウルトラ」たちから印刷所に爆弾を仕掛けられたという。Cf. Chèze, *op.cit.,* p.102-103.

62　*Ibid*., p.153-154. またこの手紙の中でフェラウーンは，ロブレスを含めたフランス人を「君たち」vous とし, 自分を含めたアルジェリアのムスリム現地民を「私たち」nous と呼んで，その間の対立を明確に論じている。

63　フェラウーンの父親は 1958 年の 10 月 31 日の晩に病気で死亡したが，翌 11 月 1 日は FLN の指令によって現地民にとっては「アルジェリア革命」を記念するゼネストの日とされており，親族は外出すら不可能で電話連絡もできなかった。結局 SAS の隊長が電報をくれたのだという。フェラウーンは嫌悪していたこの隊長にこの件では感謝している。かくして一ヶ月後フェラウーンは，父の墓参りのために久しぶりに故郷に戻る。そして今や女ばかりとなった村が,「軍」と「テロリスト」の双方から人々が隷従を強いられ, 罵倒と略奪（供出の強要）を受け, 暴力・殺害の標的とされている現実を改めて痛感する。複雑であるのは,「敵」（フランス側を指す）や暴虐者たち（独立闘争戦士たちを指す）が見知らぬ他人ではないことだ。村の学校はゲリラの拠点として占拠されていたが，滞在中フェラウーンはその「テロリスト」隊長と話したことも記している。Cf. Feraoun, *Journal*, p.284-287（1958 年 12 月 9 日）。

64　現地民に対する宥和政策として打ち出された，地方自治の拡大を骨子とする新法案。アルジェリア全土に地方議会を作り，現地民議員を大幅に誕生させるとともに，アルジェリア全体を連邦議会としてまとめ，それをフランス側の代表者によって統括するという内容。FLN からの拒絶を受けただけでなく, アルジェリア在住フランス人からの強い反発をうけ，ブルジェ=モヌリ首相は 1957 年 9 月 30 日に辞職。一ヶ月あまりの政治空白を生むことになった。翌年 2 月にガイヤール内閣のもとにこの法律が成立するが，それが生んだ混迷のために新首相も 4 月 15 日に辞職に追い込まれ，再び政治空白を生んだ。

65　『記念日』p.95 には, フランスが自らの誤りをむやみに責めることは「アメリカ, イギリス，そしてより危険なことにモスクワを利することになる」という，世界情勢に関連する記述が例外的に見られる。しかし漠然とした簡素な言及にとどまっている。

66　アルジェで SAU（Sections adminstratives urbaines「都市行政部」，フランスのアルジェリア支配の末端組織で，都市部に設けられた）の隊長と歓談する仲でもあったフェラウーンは，自分が，知事からアルジェ県のムスリム議員の筆頭候補としてリストアップされていることを知る。彼は直ちにこれを拒否した。Cf. Feraoun, *Journal*, p.265（1958 年 2 月 9 日）。また，1958 年 11 月には故郷でも議員になるよう要請されたり，故郷の SAS 隊長から演説で褒めあげられたりした。そのために親族は彼が FLN から殺されることになるのではないか

と懸念し始めた。なお議員の件は，今度もフェラウーンは直ちに拒否した。Cf. *Ibid.*, p.283-284（1958 年 11 月 2 日）。

67 *Ibid.,* p.287（1958 年 12 月 22 日）。

68 この点を重視して推察すれば，フェラウーンは考えあぐねていたこの小説の展開を，パリ出張から戻ったあとに書き進め，年末の休暇のうちに書き終えたのではないかと想像される。

69 ジェラール・ジュネット『物語のディスクール――方法論の試み』花輪光・和泉涼一訳，書肆風の薔薇，1985 年（Gérard Genette, *Figures III*, Seuil, 1972）。

70 同書，p.50-62 参照.

71 この意味で『記念日』は，「範例性」の問題と深くかかわる作品であることをあらためて強調しておきたい。拙著『デリダで読む『千夜一夜』――文学と範例性』（新曜社，2009 年）を参照のこと。

72 ジュネット，前掲書，p.252-270.

73 同書，p.255.

74 すでに述べたように，とりわけマグレブ文学研究の泰斗であるジャン・デジューの影響力は大きい。そうした見方の延長に立つ記述のなかでも，グレーズによるフェラウーン紹介の単著の記述は典型的であると思われる。彼は 1950 年代前半頃のフェラウーンを，カビリーの田舎に収まって満足している「まだ少し子供じみた，この善良な人」と捉え，露骨に見下した姿勢を表すとも言えるような，こうした観点からの記述を重ねている（Jack Gleyze, *op.cit.*, p.67）。こうした見方は一般化されており，マグレブ文学に関心のある研究者でも，フェラウーンの作品は単純素朴で低次元にあるとの思い込みのなかに現在もいることが多いように思われる。

75 このくだりについてはフランス語原文を示しておこう。動詞の未来表現に下線を付しておく。« Réflexion faite, je vais donc reproduire ce début qui, dans notre histoire, est plutôt un aboutissement. Puis, toujours pour me justifier et pour excuser Françoise, j'essayerai d'expliquer comment nous en sommes arrivés là. Alors, il restera au lecteur à attendre le retour de mon amie, ou sa correspondance : l'histoire se poursuivra, j'espère. Je l'en tiendrai au courant, sans honte et sans vanité. » p.67.

76 2-III-(2) で主人公=語り手は，自分が老いつつあることを認識した日の憂いを語りつつ，自分の年齢から，「まわりを下に見やるだけの権威」cette condescendante autorité (p.87) を得ていることを述べる。被植民者を劣った幼い者と形容する固定した見方の逆転が狙われていると思われる。

77 青柳悦子，前掲論文，p.10。

78 Feraoun, *Journal*, p.98（1956 年 3 月 15 日）。

79 「奴らが私を厄介払いしたがっていることは明らかだった」「奴らが私を殺そうという強い動機を持っていることは明らかだった」（p.129）。